

所が何うてせう。彼が家へ歸つて見ますと、蒸麵麴は食ひ荒され、隅の方では、今しも猫が酢の小樽の蔭へ這入つて、うなりながら鶏の雛を食つてゐる最中なのです。

「やい、此の食ひ辛棒やい悪黨！ 貴様は壁に對しても耻ぢさうなのに、人が來てもまだ耻ぢないのか？」

料理人は早速猫を叱責り始めました。けれど、猫の方では夢中になつて雛を片付けてゐるのでした。

「何といふことだ？ 今迄はあれ程正直な猫であつたのに。やい、貴様は従順の手本として見られて來たのではないか。然るに此の亂暴は何といふことだ？ やい、やい、よつと聽け、これからは、隣近所の人達がかう言ふに違ひない、猫は腹の黒いやつだ、猫は泥棒だ、あんな畜生は、厨は愚か、屋敷内にも飲くことはならぬ、怒張りの狼と同じに檻の中

へ叩き込んでしまへ、あいつは悪魔だ、毒蟲だ、此の土地の穢れだ！……」
けれども猫はそれを聴きながら、一生懸命食べてゐるのでした。
一方、此の雄辯家は口のうるにまかせて、小止みなく説教を續けてゐました。

で、結局は彼が説教を繰返してゐる間に、折角の焼肉が残らず猫の腹におさまつてしまひました。

だから私は他の料理人に忠告します、権力を揮ふべき場合に、空しく口舌を弄しないやうに、之れを思ひ出すため壁に印をつけて置くがよい。

五八三人の男

三人の男が、とある村へ泊り込みました。此の人達はベトナムブルグ

で車夫の渡世をして、稼いだり遊んだりして、そして再び故郷の我が家へ歸る途中でした。

が、さて腹を空かしたまゝ、寝るのも好ましくありませんから、此の客人達は夕食を取り寄せました。田舎の野菜といへば知れたものです。先づ肉の無い汁が一杯出る、それと麵麩、それから残りものゝ粥位なものでした。都に居れば、こんな譯ではありませんが、此處は田舎のことですから、別に文句も言ひません。まあ、ひもぢい思ひをせず、に寝られるだけでも幸だと諦めてゐました。

さて三人の男は十字を切つて、皿に向ひました。と、そのうちの小才の利く一人の男が、三人分としては少々不足なのを見て取りまして、一と狂言かくことにしました。

(力を以て取れない時は、智慧を用ひねばなりません。)

「おい兄弟、お前達はあのフオマの奴を知ってるだらう？ 野郎もこんどとられるさうだな。」

「とられると云ふと、何に？」

「知れたことよ、兵隊にサ。噂の通り、支那との戦争へやられるんだ。つまり、我が國の王様が、支那人から紅茶をみつがせやうといふんでさ。」

そこで、二人の男は戦争がどうなるか、何れが勝つかと話し始めました。(不幸にも、彼等は讀書が出来ましたから、早速新聞の記事を讀むのでした。)そして、話をだんくと進め、推量や説明や議論にまで花を咲かせました。

所が一人の智慧を出した男はそれを望んだのでした。ですから、二人がやれ作戦の、やれ戦闘の、やれ配軍のと話し込んでゐる間に、一人

で黙つてお汁もお粥もきれいなつぱりと食べてしまひました。

その上で彼も話したが、其話は例へば印度がどうしたとか、何時何のためにかいふことで、他人には用の無い話でした。それを彼は能く解つてゐました。が、ふと振り返つて見ると——自分の村が鼻の先で焼けてゐるではありませんか。

五九 不仕合せな百姓

ある百姓の屋敷へ、秋の夜、泥棒が這入りました。泥棒は蔵の中へ忍び込んで、自由に壁床、天井などを探り、盗めるツたけ遠慮なしに盗みました。尤も泥棒のことで、すから、何の遠慮もする筈はありません。

それから何うなつたかと申しますと、寝る時には裕福であつた其の百姓は、氣の毒にも、起きた時には素寒貧となつてゐました。それも只

の貧しさではなくて、首に袋でも吊つて出掛ける程みじめな身の上となりました。こんな眼醒めは餘り氣持の宜いものではありません。

百姓は歎き悲しんだ揚句、親戚朋友を始めとして、洗禮の時の教父母、結婚の時の媒酌人、その他隣近所の者を残らず呼び集めました。そして、

「皆さん、なんとか私の不幸を助けて下さるわけには行きますまいか？」

と言ひました。

そこで、人々は百姓と細かい話をしては、それ／＼立派な助言を致しました。

教父のカルズイチといふ人は、

「これはお前さんが自分の裕福なことを世間に吹聴したから、それで

出来たことだ。吹聴などはしなければよかつた。」

と言ひ、媒酌人のクリムイチといふ人は、

「お前さん、よく聞いて置きなさいよ。そして、これから先土藏を立てる時は、もつと家へ近く建てるやうになさい。」

と言ひました。すると隣のフオカといふ人が、

「いや、皆さん、それは少々違つてると思ひます。土藏が離れてゐたつて何も支障はありません。唯屋敷の内へ猛々しい犬を四五疋飼つて置けばよいのです。それには、丁度私の所に犬の子が出来てゐますから、お前さん何れでも好きなのをお取りなさい。私は自分の隣の人に物を願つことが出来れば、それが何よりの喜びです。」

と言ひました。一口に言へば、親愛なる親戚朋友から幾多の有益なる助言を與へられたけれど、事實に於ては何等の助けをも施されな

つたのです。

六〇 配當

一つの大きな家と事務所とを有する、或る正直な商人達が、お金を山のやうに儲けました。そこで一と先づ商賣を切りあげて、利益を配當することにりました。

所が分配となると、兎角悶着の起るもので、此の人達も大騒ぎを始めました。そして金子のこと、物品のことで争つてゐますと、俄かに家の中で火事だ火事だと嘯鳴り始めました。一人の人がそれをきゝつて、

「おい／＼勘定は後でも出来るから、早く行つて家や品物を救ひ出さうよ！」

と言ひましたが、誰も耳を貸してくれませんでした。一人が、

「私に先づ取分の千ループリを渡して貰ひませう。さもなければ私は此の場を一步たりとも離れません。」

と言へば、また一人が、

「私は二千ループリ受取らねばなりません。それはもう分り切つた勘定です。てないと私は承知しません……」

と言ひ、何だ斯だと騒ぎ立て、家が火事であることも忘れて争つてゐました。其のうちに彼等は火炎に包まれて、とう／＼家財もろ共焼け死んでしまひました。

餘り大切でもない事のために、人がよく斃れてしまふのは、共通の不幸を仲よく迎へるからではなくて、多くは各々が自分の利益を

六一 白鳥と猛魚と蝦

仲間同志の間に一致といふものがないと、その仕事はうまく行くものではないと、昔に仕事は成功しないばかりではなく、徒らに苦勞するだけです。

ある時、白鳥と蝦と猛魚とが一と車の貨物を挽かうといふので、皆その車にとりつきました。そして三人一緒になつてうん／＼力を入れましたが、ちつとも動きません。貨物を見ると、三人には少し軽過ぎる位なのです。がしかし、白鳥は空の方へ曳きあげやうとし、蝦は後へ曳き摺らうとし、猛魚は水中にひつぱり込もうとするのです。此の三人のうち、執れが悪くて執れが正しいか、それは私共の論ずべきことでは



奏合部四

ありません。が車は今も矢張一ツ所に立ち往生してゐます。

六一四部合奏

剽輕者の猿と、驢馬と、山羊と、それから歪み足の熊とあつまつて、四部合奏をして見やうといふことになりました。そして音譜とバスとアルトと、二挺のヴァイオリンとを手に入れ、菩提樹下の草原にすわりました。さアこれから此の技術を以て世界を酔はしてやれと、弓をあて、弾き出しましたが、いやはやゝ話にはなりません。そこで猿が聲をあげて唳鳴りました。

「待て／＼兄弟！待てといふに、音楽にはちやんと遣方があるんだ。君達の坐り方はそれは間違つてゐる。熊君はバスと一緒にこつちへ来て、アルトと向ひ合はなけりや駄目だ。僕は第一聲だから第二聲と

向ひ合ふ。今度こそは本統の音楽になるから、林も山も踊り出すか知れないぞ！」

言はれるまゝに、他の者共は坐り直して、又四部合奏を始めました。が、矢ッ張りうまく行きません。と、今度は驢馬が、

「おう待つたく、俺が秘訣を考へた。皆並んでやれば、屹度うまく行くに違ひない。」

と叫びました。皆其言に随つて一直線に並んで坐りました。が、それでも四部合奏はうまく行きません。一體何う坐ればよいのかといふ問題で、彼等の間にはまへよりも一層激烈な議論が持揚がりました。此の大騒ぎの所へ恰度差し蒐かつたのが一羽の鶯でありました。そこで皆の者は、此の鶯に向つて問題の解決を願ひました。「鶯君、誠に濟まないが、一時間ばかり此處についてゐて、僕等の四部

合奏を整へて呉れ給へ。此の通り音譜も樂器も揃つてゐるのだが、何うも坐り方が解らないのだ。一體何う坐つたらよいものかしら？」鶯はこれに答へて、斯う言ひました。

「音楽家になるには天才が無ければ駄目です。次には耳がもつと良くなければ駄目です。——皆さんおよしなさい。皆さんが如何様に坐つて見た所で、逆も音楽家にはなれませんよ。」

此の寓話を作る動機となつたのは次のやうな事情でした。一八一年にベテルブルグに「露西亞文學愛好者談話會」といふ結社が起されました。所が或る二三の會員の考へによつて、此の談話會が奇怪にも官立的の性質を帯びるやうになりました。この結社には若干知名の文士も入會してゐましたが、會員の大

多数は文才などは碌にない者ばかりでした。クルイロフはつまり此の點を諷したのです。

六三 象と小狗

一匹の象が街路を曳かれて行きました。つまり見世物の象でありました。言ふまでもなく私共の國に於ては、象は珍らしい動物でありますから、その後から大勢の見物人が跟いて行きました。すると、何處から出て來たものですか向ふから一匹の小狗が遣つて來まして、象を見ますと、忽ちそれに吠えたり、唸つたり、跳ねたりして、象に喧嘩を賣りかけたのでした。

「おい、止せ／＼見ツともない！」とその小狗に聲をかけたのが狎てありました。「どうせ、お前は象の相手になれはしない。見ろ、お前はもう嗚れ聲になつてゐるのに、あの象は平氣でゐるではないか。てんでお前の吠え聲を氣に止めてゐないのだ。」

「なに言つてるんだい！」
と言つて、小狗は猶ほ續けました。

「それだからこそ俺は益々元氣づくんぢやないか。かうすればナ、俺は些とも喧嘩をしないで、大喧嘩士の仲間にはいれるといふものだ。さうだらう、これを見た犬共はきつと斯う言ふに違ひない。あの小狗の奴却々強いのだな、象にさへ吠えついてゐるツて。」

六四 栗鼠と鴨

ある田舎の祭日のことでした。地主の家の窓下へ大勢の人が集つて、車輪を廻す栗鼠を珍らしさうに眺めてゐました。

所がその近くの樺の木からも此の栗鼠を眺めて不思議がッてゐる者がありました。それは鶉といふ鳥でした。見てゐますと、栗鼠はひくくした尻尾を脹らまして、足の見えぬ程速く馳せてゐました。

そこで鶉が訊いて見ました。

「もし〜栗鼠さん、お前さんは其處で何をしてゐるのだから私に聴かして呉れ。」

「あう、誰かと思へばお前さんか！私は大旦那の家で飛脚の役を勤めてゐるのだが、實に忙しいよ。飲む暇も、食ふ暇も、息を吐く暇もありやしない、一日中働き通しだ。」

かう言つて、栗鼠は又車輪を回轉し始めました。其の時鶉は、

「成程、お前さんが馳せてゐることだけは儘かなものだ。だが、何時までつても同じ窓の上にあるてはないか。」

と言つて飛び去りました。

ある働き人を見ますと、恰度車輪の中の栗鼠のやうに、一生懸命に働いてゐます。皆の者はそれを不思議がつてゐます。全く此の人は全力を擧げて努めてゐるやうです。が、其の實少しも進捗りませぬ。

六五手箱

唯あたりまへに手を卸しさへすればよい所へ頻りと骨を折つたり智慧を使つたりすることは、往々有る勝ちのものです。

或る人の所へ一人の職工から手箱を贈つて來ました。それは細工と言ひ、飾りといひ、一と際人目をひきました。で、誰も彼もがその美しさに見惚れてゐました。

此の時、其の部屋へ這入つて来たのが、一人の機械學者であります。彼はその手箱を一瞥するより早く、かう言ひました。

「此の箱は秘密な開き方をする箱でせう。おう、さうだ。鍵も附いてはゐない。どれ、私が一つ開けて見ませう。ははあ、かうなつてゐるな。さう、クス／＼笑ふもんぢやありませんよ。お待ちなさい、今秘密を探りあて、開けて見せますから。そして機械學者としての價値を少々お目にかけてますから。」

斯う言つて、彼は手箱を取りあげて、あつちから廻したり、こつちから捻つたり、頭をいためながら、此の釘を押すやら、かの針を引くやら、さうかと思ふと、鐵鈕を壓へて見たり致しました。側にある者のうちには、首を振りながら眺めてゐる者もあり、ひそ／＼何か言つては互ひに笑ふ者もありました。けれど機械學者の方では一生懸命です。汗を流し

て探してゐますが、手を動かす度に、

「其處ではない。さうてはない。あそこぢやない。」

といふ聲が耳元に聞えるばかりです。で、とう／＼解らないで丁ひました。

けれど、此の手箱は普通に開ければ直ぐ開くのでした。

六六 雨 雲

炎熱のために困憊り果てた土地の空を、一團の雨雲がすう／＼と走り過ぎましたが、一滴の雨も落しませんでした。然るに此の雲は、海の上まで行きますと、急に大雨を落しました。それから山の上へ来て、自分の恩恵を誇りました。

此の時、山が兩雲に向つて言ひました。

「あなたはそんなへまな恵みを施したつて、何の善い行ひにもなりませんよ。この雨を若し野原へ注いでやつたら、此の地方一帯を飢饉から救ふことが出来たのです。あの状は見ても痛ましいてはありませんか。それをあなたは海の上などへ水を落しました。海にはあなたのお蔭がなくとも、水はたっぶりありますよ。」

六七 金貨

何處の地方にもよくあるやうな間拔けた男が、土の中から一枚の金貨を掘り出しました。金貨は芥だらけて汚れてゐました。所がそれを見た人々は、五錢の白銅を三ツ遣るから、その金貨と取替へないかと言ふのでした。が、例の男は、「待て、俺はその二倍も貰つて見せる。折角手を卸して得たものを、さうあやすくとられて堪るものか。」

と考へ、それから砂や小石や白墨を持つて来て、また煉瓦をも粉に砕いて、仕事にとりかゝりました。て、何をしたかと申しますと、此の男は一生懸命煉瓦や砂や小石や白墨で、以てその金貨を磨いたのです。つまり燃えるやうに光らせようと思つたのです。果して金貨は燃えるやうに光つて来ました。が、それと共に目方が減つて行きました。そして以前の價值を失つてしまひました。

六八 貴人

昔ある貴人が立派に飾られた寢臺から、地下のブルトン王の國へ旅立ちました。つまり死んだのです。すると、例によつてその人の裁判が始まりました。

「貴様は何をして居つたか？そして何處に生れたか？」
といふ審問を受けました。

「私はベルシヤの國に生れました。位は州長でありました。けれど私は存命中健康が勝れませんでしたから、その州を治めることは自分でせず、一切秘書官任せにして置きました。」

「然らば貴様は何をしてゐたか？」

「飲んだり食つたり眠つたりしてゐました。そして秘書官の差出す書類にたい捺印だけしてゐました。」

「よろしい。では早速天國へ遣る！」

これをきくと、竊盜の神のメルクワイといふのが自分の身分をも忘れて、

「そ？何ですと？そんな不公平なことがありますか。」

と叫びました。

「これ兄弟！貴様はカラ分らず屋だなア！」とそれを制したのは裁判官の一人でありました。——「いゝかな、此の死人は馬鹿であつたのだ。若しも馬鹿者がそんな権力を握つて事に當らうものなら、何んな不幸を招くかも知れない。一國を擧げて滅亡の淵へ墜さないとも限らない……さうしたら何れほど涙が流されたか知れたものでない！だから彼は事に當らなかつた故を以て、天國へ遣られたのだ。貴様にはそれが分らんか。」

昨日私は裁判所へ行つて見ました。あすこにゐた裁判官も多分天國へ遣られるでせう。

六九 栗鼠

一疋の栗鼠が獅子の所で仕へてゐました。何を何んな風にしてゐたのか知りませんが、兎に角栗鼠の働き振りは獅子の氣に入りました。けれど獅子の氣に入るといふことは、これにて一通りや二た通りの業ではありません。が、その代りには胡桃をひと車といふ約束が出来てゐました。

兎や角するうちにだん／＼年は過ぎて行きます。時には栗鼠も空腹な事がありました。そして蔭ながら涙を吞んで獅子を恨むこともありました。

彼方の杜を見遣ると、そこには彼方此方に自分の友達等がちらほら見受けられます。こちらは唯眼をしばたいてゐるだけですが、あち

らに遊んでゐる栗鼠達は心ゆく程胡桃を噛つてゐます。

さればと言つて、此の栗鼠が杜の方へ行つて見やうとすれば、直ぐ見付かるので、それも成りません。そして何故獅子に使へないのかと、嗚られたり、突つかれたりするのでした。

やがて、此の栗鼠も年老ひたので、獅子の御寵愛もなくなり、いよいよ職を退かせられることになりました。そこで、約束通りに胡桃をひと車下賜されました。見れば、その胡桃の立派なこと、本統に世界中探しても見付からぬ程の品でした。一と粒選りといふのは眞に此のことてせう、どれもこれも皆美しくありました。

が、たゞ一つ拙いことには、栗鼠の歯が疾うにかけてしまつてゐたのでした。

七〇 百姓と奉公人

私共はある不幸に襲はれた時には、祈るやうにして人の扶けを乞ふのです。けれどもその不幸が肩から卸されますともうその救ひ手にかたをつけます。そしてその人のして呉れた事を何うの斯うのと言ひます。その場合大概は難癖を着けるのです。

ある年老いた百姓が、奉公人と一緒に、夕方林の中を歩いて來ました。彼等は草刈りに行つて、今村の我が家へ戻る所です。所が何ういふ具合でしたか、ひよつくり熊と鼻を突き合せてしまひました。百姓はあつといふ間もあらせず、熊に乗り伏せられてしまひました。熊は百姓を組伏せると、今度はそれを轉がすやら、抑えるやら、何處から引裂かうかと場所を選んでゐるのです。老人の最期は刻々と迫つて來ました。

「ステバン何うにかして呉れ、後生だ！」

熊の下から聲を出して、老人はその奉公人を呼びました。

そこで、ヘラクレスのやうな勇士は身にあるツ丈の力を斧の先に込めて、うひとばかりに熊の眉間を割りました。續いてその胴腹へ鐵槌をづんぶり突き刺しました。

熊は、うーつと吼えて、そのまゝ打ち斃れてしまひました。これ先づ熊は退治出來、災難は逃れました。所が百姓は起き上るや否や、もう奉公人を馬鹿よ間拔けよと嗷鳴りつけてゐるのです。ステバンはわけが解りませんから、可哀相にも狼狽へて、

「旦那何をそんなに怒つてゐるんです？」

と訊きました。するとどうでせう、

「怒るも糞もあるもんか？此の木偶奴！これを喜んでたまるものか。」

見ろ、貴様の裂き方を、折角の毛皮を傷だらけにしたてはないか！
とのち小言でした。

七一 二人の少年

「おい、セーちゃん、羊みたいに教室へ逐ひ込まれないうちに、あっちの庭へ行つて、栗を取つて来やうぢやないか！」

「それは駄目よ、へーちゃん。あの木は高くて、逆も僕等には登れないんだから。だからあの栗は僕等の口には這入らないよ。」

「何をつまらん事を言つてるんだい。力で取れなければ、智恵を出せばいいぢやないか。僕にはちやんと考へがあるんだ。さア行かう。だがね、君は僕を助けて一番手近な枝に掴ませるんだよ。さうすれば僕等はうまい工夫をして、幾許でも栗がとつて食へるんだ。」

二人はひた走りに栗の方へ駆けて行きました。セーニヤは友の木登りに手傳ひ始めました。一生懸命うん／＼押しあげるので、全身汗びっしょりになりました。そしてへーヂヤをとら／＼揚げてしまひました。

へーヂヤは小廣い所へ登つて、まるで穀倉の鼠みたいにゆつ／＼り落着きました。栗の實は到底食べきれぬ程澤山あります。いや、數へきれない程澤山あります。これでこそ取るにも、友と分けるにも張り合があるといふものです。

所が何うてせう？セーニヤの得る所は至つて少なく、彼はたゞ下の方で口を舐つてゐるだけでした。へーヂヤは木の上に登つて、自分ばかり食べて、その皮だけを友の前へ落しました。

自分が登る時は非常に友達から助けられてゐて、登つてしまふと、もうその友へは皮も投げない——かうしたヘーヂャは世間に澤山居ります。

七一粉挽爺

粉挽場の水が土手を透して滲み出しました。最初のうちに手を卸せば大した事はなかつたのですが、此の粉挽爺さんは一向平氣なもの別に氣にもかけずに居りました。所が滲み出す水の勢は日に——強くなりまさり、今はバケツの水を流したやうに、迸つてゐます。

「さア爺さん、油断してると大變なことになるですよ。何うにか方法を講ずるのは今です。全く今です。」
けれど爺さんは、

「まだ——大丈夫だ。水が海程あつたつて仕様がなない。この位あれば俺の生きてるうちは充分だ。」

と澄ましてゐました。所が彼の眠つてゐるうちに、水は手桶をひッくりかへした程の量になり、そして愈々大變なことになるました。磨臼は停り、水車は用をなさなくなりました。

そこで爺さん、始めて眼がさめて、呻き悲しみましたが、やつぱり何とかして、水を防がねばなりません。さて彼が土手の所で滲出口を検べて居りますと、その傍へ鶏共が水飲みにやつて來ました。それを見るより早く、爺さんは、

「此の馬鹿奴等！俺は今水を失くして困つてゐる所ぢやないか。それを貴様達は最後の一滴まで飲み乾さうといふのだらう。」
と言つて、薪で鶏共を殴つてしまひました。それで自分にどんな利

益があつたかと言ひますと、利益所の沙汰ではありません。水を無く
なした上に、鶏まで無くなして、自分の屋敷へ歸つて行きました。

廣い世間には、詰らない事のために數千金をも惜まず投じながら、
蠟燭の餘燼を節約すれば、それで家計が助かると思ひ、それがため
に人々と大騒ぎを演じて憚らない者が居ります。そんな節約を
して居つて、家が倒れるやうになるのは、何も不思議なことではあ
りません。

七三 狩に出た兎

ある時、林の獸共が大勢一緒になつて熊を生擒にし、廣い野原へ引摺
り出して殺しました。そして誰が何所をとらうかと、互に分配の相談

を始めました。すると、傍から一疋の兎が熊の耳をくはへて頻りと引
張つてゐるのです。

「やい、兎公、貴様は何處から出て來たのだ？ 狩をする時に貴様は
居なかつたぢやないか？」

大勢の者がかう言ひますと、兎は之に答へて、

「まア皆さんは何を言ふのです。林の中から追ひ出したのは一體誰
だと思ひます？ 私はあれほど此の熊をびっくりにさせて、そしてみなさ
んの居る方へ追ひまはして來たぢやありませんか？」
と言ひました。そんな法螺を吹いても誰も本氣にする者はありま
せんでしたが、その言ひ方が面白いので、兎にも耳を一と房呉れてやり
ました。

法螺吹きは人に笑はれることもありますが、それでも何うかすると

配當に與かることがあるのです。

七四 百姓と蛇

ある時、一疋の蛇が百姓の家へ来て、

「小父さん、私を此の家へ置いて下さいな。唯のらくらしてるのぢやありません、子守か何かさしていたゞくのです。自分で稼いで食べる麵包は美味しいと言ひますから。」

と、折入つての頼みてした。そして尙説き立て、言ふには、

「小父さんは、私が蛇なもんですから、それで毛嫌ひをしてるのでせう。成程蛇といふ名は人に嫌はれます、悪漢のやうに思はれてゐます。思も知らなければ情も無く、まるで自分の兒でも取つて食ふかのやうに思はれてゐます。或はそれが本當かも知れませんが、けれど私だけは

そんな蛇ぢやありません。私は生れて此の方、一遍も人に喰ひついたことが無いばかりか、てんで悪いことをするのが大嫌ひなんです。此の口にある毒齒などは、無くつてもよいものなら、疾うに抜かしてしまひたい位です。本當に私位善い蛇は無いのです。てすから小父さん、先づ私を使つて見て下さい。さうすれば私にどれだけの愛があるかと解ります。」

「如何にもお前の言ふことは本統だらう。だが私は何うしてもお前を家へ置くわけには行かない。若しも私がそんな例を一つ作つたら善い蛇ばかりぢやない、悪い蛇までが續々押蒐けて来て、家の小兒を喰ひ殺してしまふ。だから、お前が幾許氣質のよい優しい蛇にした所で、私にとつてはちツとも有難くないんだよ。」

と百姓か言ひました。

悪いお友達と交はつてゐると、自分は何んなに善い人間でも、他から爪弾きされるものです。

七五 金翅雀と鳩

ある時一羽の金翅雀が係蹄に落ちて、可哀さうにも苦しみ悶極いてゐました。

すると若い鳩が之を見て、カラ／＼と打笑ひ、

「みツともないネ、此の晝日中そんなものへ這入るなんて。私ならそんな目には逢はないよ。それはもう確かに保證出来る。」

と言ひました。所が、さて飛び立たうとしますと、自分も最早畏にかかつてゐるのでした。いゝ訓戒です。これから先は決して他人の不幸を笑つてはなりません。

七六 郭公と鶏

「鶏さん、あなたの歌は何んてさう甲高く、重々しいのでせうね！」

「いや、郭公さん、あなたこそ流暢と心地よく歌つてるぢやありませんか。此の林の中にあなたのやうな歌ひ手は居やしませんよ。」

「あら、そんなこと仰有つて。私はあなたの歌なら何時までも／＼聴いてゐたいと思つてゐますわ。」

「いやだよ郭公さん、それは私の言ふことです。私はあなたが啼き止むともう始めさうなものだ／＼と待ち遠てなりませんよ、本統に。一體何處を押すと、そんな聲が出るのです？ 澄んだ優しい高い聲が……。あなたは生れつきさういふ美聲を持つてゐるのですね。身装こそ大きくはありませんけれど、歌と來たら、あの鶯をも凌ぐ程です。」

「鶏さん、どうも有難う。だがさう言ふあなたこそ雀皇よりもよい聲を出すてはありませんか。これは私獨りさう思つてゐるのぢやありません。誰だつて同感です。」

ふと此の話をきゝつけたのが一羽の雀でありました。雀は二人に向つてかう言ひました。

「あゝ、君達は互にそんなキーク、聲を出して、賞め合つた所で、やッぱり君達の歌は拙いのだよ？……」

何故郭公は嘘と知りつゝ、鶏の聲を褒めたのでせうか？それは自分褒められたからです。

七七 郭公と鳩

ある日、一羽の郭公が樹の枝に止まつて泣いて居りますと、それを見た鳩が氣の毒に思ひ、向ふの木から聲をかけました。

「郭公さん、あなたは何をそんなに泣いてゐるのです？春も夏も過ぎ去つて、可愛いぼつちやん達が居なくなり、そしてだん／＼と冬が近づいて来るので、それを悲しんでゐるのですか？」

訊かれて郭公はかう答へました。

「え、あなたはよく私の胸中を察して下さいませすのね。まア聴いて下さい、この春は私も漸く子鳥の母になれて、本當にこんな嬉しいことはありませんでした。所が今となつて見れば、その子鳥共は何處へ何う行つてしまつたものやら、一羽も私を母として見ては呉れません。私はこんな風にならうとは思つてもゐませんでした。あれ御覽なさい、向ふに見える鳩を、子鳩がぞろ／＼母鳥の側に寄つてゐるではあり

ませんか。また此方には、牝鶏が雛を呼び集めてゐるではありませんか。私はあのやうな様を見ると、本當に羨しくて堪りません。私はまたるて孤兒同様、此んな所に一人暮しをしてゐるのです。そして子供の愛つて何んなものか、それさへ知ることが出来ないのです。」

「それはまアお氣の毒なことですね、若しも私がそんな眼に逢つたとしたならば、逆も生きては居られません。だけど郭公さん、あなたはその子鳥をもう一人前に育て上げたのてしたか？ 私はあなたが巢に坐いて子供を解してゐるのを、遂に見受けたことがありませんよ。あなたは何時も飛び歩いて、跳ねたり歌つたりしてゐるぢやありませんか？」

「え、それはさうよ。天氣の好い日などに何うして巢の中にくすぶつてゐられませう。そんな詰らない暮し方をする位なら、それこそ死んだ方が増してすわ。ですから私はいつても自分の卵を他の巢に預け

ツ放しにして置いて、行きたい所へ遊びに行くのですよ。」

「それでは郭公さん、今になつて自分の子から可愛がつて貰はうツたツて駄目なことですわ。最初にあなたが可愛がつてやらないんですもの？」

と鳩が言つてさかせました。

七八 池と河

ある時、池が近くの河に向つてこんなことを言ひました。

「お前の水は何時見ても動いてゐるが、一體それは何うした譯なのだ？ そんな風では疲れきつてしまふだらう。そればかりぢやない。お前は何時でも澤山荷を積んだ船や、長い材木を連ねた筏や、數へ切れな程のボートや遊び船などを浮べてゐるではないか。何時からそんな

な暮しをしてゐるのだい？俺が若しお前のやうだつたら憤慨つて水を乾してやるのに。——お前に較べると俺なんかは實に暢氣なものだよ。なる程俺には名もない地圖の上にも現はれてゐない。また人から歌に唄はれるやうなこともありやしない。けれども軟い土堤に圍まれて、その中に落着いてゐるのは、丁度貴婦人が絹布の坐褥の上にキチンと澄ましてゐるやうなものだよ。俺は勿論船や筏の重さを知らない。ポルトさへ浮べられたことはない。それどころか一枚の木葉が飛んで来て、此の顔に當るのさへ俺には大事件だ。俺のやうな心配のない生活は何にたとへていゝか分らない。世間にどんな風が吹かろが知つた事ではない。全く夢の世界にてもゐるやうな俗離れをしてゐるのだよ。」

「だが、お前は、水は動くから清淨なんだといふことに氣が着かないのか？」と、今度は河がそれに答へ始めました。——「俺が大きな河となつたのも、滯つてゐる水を蹴とばして一緒に伴れて行くからだ。だから俺は年百年中澄んだ水を湛へてゐて、それで名も譽も揚がるのだ。お前が乾燥びて、無くなつてしまつても、俺は滔々として何時までも流れてゐられるのだ。」

大河の言つた通り、今も猶其の河は流れてゐます。しかし哀れな池は年毎に水量が減つて、だん／＼軟かい泥が堅くなり、やがて沼地になつて、水草が一面に生え、最後にはすつかり普通の地面になつしまひました。

七九 魚の舞踏

百獸の王様である獅子の國は大變廣いもので、そのうちには山もあ

れは、谿もあり、森も林も、野も河もありました。所で魚共の監督には誰をつけたらよからうかといふことになり、獅子王はあらゆる獸類を集めて相談しました。そして抽籤の結果、狐がその役に當りました。

さて、狐が魚の監督をするやうになつてからは、その狐がめき／＼肥え太つて來るのでした。それは狐が一人の百姓と組んで、何時も悪いことをしてゐたからです。先づ狐が魚の品行を見て、其のよしあしを裁きますと、側に立つてゐる百姓が、直ぐ釣を垂れてその魚をとり、さうしては二人で山分けにしてゐたのでした。

しかし悪人は何時までも榮えるものではありません。獅子王は狐の手加減が非常に厳しいことを聞いて、御自分で領地を視廻ることに致しました。さて、だん／＼だん／＼道を進んで、漸く河岸へ辿りついで見ますと、一人の百姓が魚をとつて、直ぐにそれを川端で煮て、狐と二

人で酒盛をしやうとしてゐました。魚は火にかけられると、熱いものですから、其處を飛び退かうとして、根限り跳ね上つてゐました。

これを見た獅子王は、ひッとはかりに腹を立て、百姓に向つて嗷鳴りつけました。

「やい、貴様は何者だ？一體此處で何をしてゐるのだ？」

「驚怖ろしい權幕でしたが、何時も他を騙すのに妙を得てゐる狐がその場へ駈けつけて、

「これは／＼王様でございましたか。こゝに居ります爺やは私の秘書官で、非常に正直な男でございます。人民からも尊ばれて居ります。また此の鍋に居りますのは鯉でございます。私共は王様の御出でを歓迎するため、此處へ集つてお待ち申してゐたのでございます。」
と巧みに言ひ抜けました。

「左様か、魚共はよく治まつて行くか。お前の地方の民は皆満足して居るか？」

「はい、それは王様申上げるまでもないこと。私の地方の民は只満足してゐるばかりではございません。まるで天國にても居るやうに悦んで居ります。ですから何時も王様の萬福を祈つて居るのでございます。」

此の時、鍋の中の魚が、盛んに苦しがつて跳ね始めましたから、王様は之れに眼を留めて、

「だが、其處にゐる魚共が、あんなに跳ね返つてゐるのは何うした譯だ？」

と訊きました。狐はそれに答へて、

「王様、さればでございます。魚共は王様のお出でを見て、悦びのあま

り舞踏をしてゐるのでございます。」

と出放題を言ひました。が、獅子はそれを悟らないで、

「あんなに舞踏してゐるのに、音楽が無くては物足りない喃。」

と仰有つて、御自身音頭を取り、監督と秘書官と三人して歌を唄ひ出ししました。

八〇 鮠

私は豫言者ではありませんが、蝶々が蠟燭のめぐりを飛び廻はつてゐるのを見て、豫言しますと、その豫言は大概中ります。そして私の思つた通りに、その蝶々は翅を焼いてしまひます。これは皆さんが他の事と比較べて教訓とすべきことです。大人の爲に

も小供の爲にも善い話です。と、かう申しますと、

「お話はもうそれッきりなんてですか？」と訊ねる方があるかも知れませんが。いやお待ちなさい、これはほんの口きりです。ほんとのお話はこれからです。て豫めその話に就いての教訓を言つたのです。おやく、皆さんの眼にはまた一つの疑ひが見えますね、最初は短か過ぎると思つた皆さんが、今度はどんなに長いのかと御心配ですね。それはお察しの通り少々長いですが。けれど致し方はありません。我慢して下さい。私も氣をつけますから。しかし、私も最早餘程年をとつて來ました。天氣も秋になれば雨降りの日が多いやうに、人も年寄つて來ると、口數が多くなります。これは何とも仕方ありません。

が併し、皆さん、私の言ふことを聴き洩らさないやうに、よく眼

を見てゐて下さい。私はこんな人を随分見ました。それは、軽い悪戯をしながら、それを些細なこととして、自分の罪を認めまいとする人です。さうした人は言ひます、「この位のことには罪でも何でもない、これは冗談だ」と。

然し、その冗談といふのが私共をえらい破目に陥れる第一歩なんです。冗談、冗談といつてる中に、それが癖になり、後には第二天性となつてしまひます。さうなりますと、私共は其の巨きな力に引摺られて、益々罪惡の淵に沈み、どうしてもかうしても挽回しのつかぬやうになつてしまふのです。

そこで此の己れを恃むといふ事の宜敷くないことを、もつと活きくと示すため、私は茲に一つの寓話を物語つて自分の慰みに致しませう。さて、かうなると、そのお話はベンの下からひとりて

に湧いて來ます。これが皆さんの教訓になれば仕合せです。

何といふ河だか、名前は覚えて居りませんが、その河のほとりに、水中の國の敵である漁夫の小舎がありました。そして険しい崖下の水には快活な鯰が一疋棲んで居ました。その鯰の氣質は何でも怖れないといふ勇ましい所もありましたが、また悪がしつこい所もありました。彼は釣針のめぐりをくくると、まるで獨樂のやうに廻るものですから、漁夫も時々腹を立て、自分の職業を呪ふやうなこともありました。今度こそは釣り上げてやらうと、折角針を垂れて、漁夫は浮頭から眼を離さずにゐました。やがて浮頭が動きましますから、さては懸かつたかと、胸を躍らせながら竿を揚げました。見れば蚯蚓をとられたあとの針ばかりです。大方鯰は漁夫を笑つてゐる事とせう。餌だけとつて逃

げては漁夫を騙すのです。しかし他の鯰が此の鯰に向つて言ひました。

「もしく、あなたはそんな事ばかりしてゐると、本當に碌なことはありませんよ。此の水中に、他に場所が無い譯ではありますまい。それをあなたは何時も釣針のめぐりはかり廻つてゐて、私は見るだけでもはらくしてゐますよ。そんな真似をしてると、あなたは近いうちに此の河と別れしなさいませぬ。釣針に近づくだけ、その身に禍ひが迫るのです。今日はうまくのがれたツて、明日の事は保證出來るものぢやありません。」

しかし忠言耳に遠しの做ひ、かう言はれた鯰はそれに答へて、
「折角だが、私は近眼ぢやありませんよ。漁夫の狡いのは知れたことです。しかし下らない臆病は棄てる方がいゝです。私は奴等の手管



蛙の王様

をちやんと見抜いてゐます。それ御覧なさい、また釣針が投げ込まれた。おうまた一つ二つ！私がどんな鹽梅にあれを潜り抜けるか、また見てゐなさい。」

と言ひました。

そして、矢のやうに釣針の方に走せて行きました。最初のもうまく奪りました。次のも見事に抜きました。が、第三番目のへ行つてとう／＼ひツかゝつてしまひました。かうして鱧はとう／＼災難に陥ちてしまひました。

その時彼は、初めから此んな危険へ近づかねばよかつたと悟りました。けれどもその時はもう遅かつたのです。

八一 蛙の王様

ある時、蛙共が民本政治を厭ふやうになりました。そして、何の業務もしないで、我儘に暮すといふことは宜敷くないと思ひつきました。で、此の惱みを脱するため、彼等は神々に向つて、王様を立て、欲しいと願ひました。

一體神様といふものは、何んな出鱈目なお願ひでも聽入れる筈のものではありませんが、此の度ばかりは、ビススといふ神が彼等の言ひ分を聞き取つて、彼等に王様を授けました。王様は天の一角からえらいうなりを發て、降りて來ました。そして、沼の國が暫らくの間揺れてゐた程強くどしんと落つてしましました。驚くの驚かないのツて、蛙共は力の續く限り、足先の向いた方へ、一生懸命逃げました。そして、各自分の穴へ這入りますと、ひそ／＼話をしながら王様を畏れてゐました。蛙共の驚きも無理ではありません授けられた王様といふのは、それ

は變挺な方でした。こせくした所もなく、軽々しい様子もなく、どしりと殿めしく、そして一切口を利きません。身幅もあり身長も可也の巨物で見た所は、それは立派なものでした。けれど、たゞ一つ此の王様に物足りない點がありました。それは此の王様が白楊の樹の根子だつたといふことです。

最初蛙共は、王様の畏れ多い人格を敬つて、誰一人容易に近づく者はありませんでした。たゞ怖さうに王様を眺めてゐました。その眺めるのもたゞ眺めるのではありません、石菖蒲や節草の間からそつと窺み見してゐるのでした。然し、見慣れて見れば、世の中に不思議なものはないといふ通り、蛙共も最初の程は息を殺して怖れてゐましたが、後には、悉しく王様の方へ這ひ寄るやうになりました。初めは王様の前に跪いてゐましたが、少し経ちますと元氣のよい者などは横面を向け

て坐るやうになり、次には王様と並んで坐るやうになり、もつと圖太い奴は、最う王様へ尻を向けて坐るやうになりました。王様はその御慈悲によつて、何をされても耐へてゐました。稍々少時経ちますと、蛙共は思ひのまゝに、王様の上に跳び上がるではありませんか。そして三日ばかりのうちに、最う此の様な王様と一緒に暮らすのは厭になつてしまひました。

そこで、蛙共は更に嘆願書を作り、わが沼の國へ眞實に偉い王様を授けて貰ひたいと、ユビテル様へ願ひしました。ユビテル様も彼等の熱心なる祈禱を聞き入れて、沼の國へ鶴を遣はしました。さて此の王様は根子や何かとはまるツきり違ひますが、自分の臣民を可愛がるなうて事は知りません。悪い者をば片ツ端から食べてしまふのです。て此の王様の裁判に立つたら、如何なる者でも悪い者にされてしまひ

ます。そして王様のお食事と言へば、朝も晝も晩も屹度お裁きでした。てすから沼の國へはえらい厄年が襲ふて来て、人民は日に日に減つて行きました。

王様は朝から晩までその國中を歩き廻り、目に止まる者は誰彼の容赦なく、直ちに之を裁判し、そしてべろりと丸呑みにしてしまふのです。蛙共は、これでは大變だといふので、前よりも一層泣き聲、呻き聲をはりあげて、ユビテル様に嘆願を始めました。どうか他の王様と代へて下さい。今の王様は人民をまるて蠅か何かのやうに呑んでしまひます。てすから、鼻先を出すことも、クワリと一と聲鳴くことも、恐ろしくて出来ません。此の王様は本當に早魃よりも怖ろしい方ですと。

すると、蛙共に向つて天からかういふ聲がきこへました。
「馬鹿者共、何故お前達は是迄よく暮すことが出来なかつたのだ？か

うなつたといふのもみんな自分から出た事だ。王様を欲しい／＼と騒ぎ出したのはお前達ではないか。だから王様を授けてやつたのだ。所がそれがあまりに溫和しいといふので、お前達の國が大騒動になつた。そこで他の王様を授けてやれば、今度は酷すぎるといふ。そんな我儘を言はずにその王様と一緒に暮すがいい。さうすればそれより悪くなることはない！」

八二二 一羽の鳩

二羽の鳩がまるで同胞の兄弟のやうに仲好く暮してゐました。どちらかなくなるると、一方のものでなくては飲み食ひをしませんでした。また一羽の居る所にはきつと他の一羽もゐました。嬉しいことも悲しいことも皆二人で分か合ひ、時の経つのも知らずに居りました。二

人は悲しい事はあつたが、淋しいことや退屈するやうなことは決してありませんでした。

かうしてさへゐれば、何も分れくになつて、何處かへ行かうなどは、思へない筈です。所がさうでなくて、此の二羽の中の一方は旅行して来たいと思ひつきました。別にこれといふ用事のある譯ではありませんが、たゞ世間の珍らしい出来事を見物したり、嘘と誠を見分けたり、嘘と事實とを質したりして来やうと思つたのです。

と、も一羽の鳩が涙ながらにかう言ふのでした。

「およしなさいよ。世間をぶらつき歩いたつて、何の利益もありません。それともあなたは私と別れようといふのですか？ 縦へ私が嫌いになつたとしても、旅に出れば猛々しい鳥や、係蹄や、怖い雷などが待つてゐるではありませんか。でも矢ッ張り遠い所へ行きたいのなら、春

までお待ちなさい。春になつてからなら、私はもうあなたをひき止めようとは致しません。今はまだ食物も少いし、それに……。あれ鴉の鳴き聲も善くありませんよ。屹度悪い事になるんです。だからどうぞ家におて下さい。ほんとにかうしてゐれば、楽しいぢやありませんか。それを何處かへ行くなんて、気がしれませんわ。そればかりぢやない、あなたが居なくなると、私はまるで淋しくなつてしまひます。そして眠つてゐる間も、係蹄や、齋や、雷などの夢ばかり見て、あなたの身に變りはないかと心配が絶へません。頭の上に小さな雲が見えても、――あゝ私の友は今頃何處にゐるか、病氣ではあるまいか、お腹が空いてはゐまいか、雨風にあたつてはゐまいかと、そんなことばかり氣にするでせう。」

此の言葉をきいて、他の一羽の鳩は、じみじみ友の心をいぢらしく思

ひました。けれど行きたいのは山々です。たゞもう行きたいとはかり思つてゐるものですからぢつと落着いて考へることが出来ません。で、一方の鳩を慰める積りてかう言ひました。

「泣くのはお廢しなさい。私はものゝ三日と別れてゐる譯ではありません。飛びながら急いで色んなものを見て、そして何か珍らしさうな物さへ見れば直ぐまた此處へ歸つて來ます。其の時には色々と話しが盡きないでせう。私は何時何處へ行つて、それから又何處へ行つたといふ鹽梅に思ひ出しては話します。お前さんはそれを聞きながら、まるで自分も飛び歩いてゐるかのやうに思つてせう。そんな面白いことはありませんよ。」

と、茲に詮方なく二人は接吻をして別れました。

さて、旅立つた鳩がだん／＼だん／＼飛んで行きますと俄かに雨が

降つて來て、そして雷が鳴り出しました。下を見れば、まるで大海原のやうな青野原が涯もなく擴がつてゐます。あゝ何處へ身を隠したら宜からうと捜すうちに、幸ひ一本の枯れた樫の木が眼にとまりましたから、とにかく其處へ身を潜めてびつたり縫りついてゐました。がしかし、此の鳩は其處で風から隠れることも、雨を避けることも出来ませんでした。で、全身ぶぶ濡れになつて顔へてゐました。

やがてのことに雷雨もだん／＼静まり、太陽の光も射して來ました。さうなりますと、鳩はもつと先へ行つて見なくなり、とう／＼飛び起つて出掛ました。そしてだん／＼行きながら、鳩は樹の下の寂しい所に小麥の散らばつてゐるのを見ました。で、降りてまゐりますと、ぱつたり其の場にあつた毘にかゝつてしまひました。何處も彼處も災難だらけてす。鳩は羽根を顔はしたり、足掻いたり悶掻いたりしてゐまし

た。幸ひなことに、その網が古かつたので、漸くそれに穴をあけて出た。が、片足は脱骨し、翼は揉みくちやになつて了ひました。然し、そんなことを言つては居られませぬ夢中で逃げ去りました。すると、今度は前よりも酷い災難が降りかゝつて來ました。それは、何處から來たものか、猛々しい鷹が現はれたのです。鳩は生きた心地もなく、有りツ丈の力を出して逃げ始めました。が、力は忽ち盡きてしまひました！ 見れば、荒々しい爪は頭上に伸ばされ、廣いく翼からは寒い程風が煽られて來ました。此の時、一羽の鷺が天空の一角から矢のやうに飛んで來てば、と鷹に身の中てましたので、あれよと見る間に、猛鳥は猛鳥の餌食になつてしまひました。

その隙を見て、わが鳩は石礫のやうに下へ降り、とある籬に身を寄せてゐました。けれどその身に及ぶ禍ひはそれだけではまだ終りませ

んでした。一厄拂つては又一厄迎へたのです。それは、一人の未だ思ひ遣りも何もない少年が、瀬戸物の碎片を我が鳩に投げつけて、その顛顛を傷けたのでした。

此の時鳩は、漸く世界漫遊の思ひを棄て、頭を碎かれたまゝ、翼を揉みくちやにしたまゝ、片足を脱骨したまゝ、何うにか斯うにかわが家へ迎りつきました。嬉しいことには、其處にはちやんと友だちが待つて居りました。そして、色々の世話から介抱までしてくれるのでした。それと共に、あらゆる不幸艱難もだんくんと忘れられて行きました。

世界漫遊をしたいと思つてゐる人は此の寓話をお読みなさい。そして遠い旅路に出るならば急がずに立つ方が宜しい。あなたの想像は何のやうなものを描いて見せるか知れませんが、と

にかく、あなたの好きな人、又はあなたの友の居る所より好い所は
ありません。

八三 慾張者と牝鶏

慾張り者は一切を手に入れやうとして、一切を失つてしまふもの
です。その例を挙げようと思へば幾許もありますが、皆舉げるに
も及びませんから、極手短かな例をとつて、皆さんに一つの古い話
を致しませう。

私が子供の時分讀んだことですが、それはかういふ慾張りの話です。
ある所に、如何なる職も持たず、何のやうな仕事も知らない人がありま
した。それでゐて、此の人の葛籠は金一杯這入つてゐたのです。

といふのは、彼の所に一羽の牝鶏が居りまして、(羨しいてはありませ
んか)それが毎日黄金の卵を産んだのです。

普通の人間ならば、それが一つづゝ溜るだけでも満足してゐるので
すが、此の慾張り者にはそれが不足なのでした。て、色々考へた揚句、そ
の牝鶏のお腹を裂いて、中にある寶を一時に手に入れようと思ひまし
た。そして、とう／＼今迄恩恵を受けたことも忘れ、忘恩の罪をも怖れ
ないで、牝鶏の腹を裂きました。所がどうてせう？その報は靦面
す。彼は牝鶏の腹から普通の臟腑をひき摺り出したばかりでした。

八四 鶏と眞珠

ある時、鶏が芥溜を掻き散らしながら、一粒の眞珠を見付けて、かう言
ひました。

「何んて詰らない物だらう！何の用にも立ちさうもない。こんなものを珍重するのは馬鹿な話だ！俺ならば、小麦の粒の方を餘程嬉しが
るのに。小麦は見榮えこそしないが腹の足しになる。」

無智な人々の鑑定も恰度此の通りです。何を捉まへて言つてもそれは出鱈目です。

八五 鴉 と 鶏

むかし、スモレンスキイといふ將軍は自分の國へ攻め寄せた敵軍に對して、一つの策略をたくらみ、彼等を罠に陥れるため、故意とモスクワを開け渡さうとしました。町の住民は年寄も若者もみな、時を移さず城外へ逃げ出すので、まるで蜂の巢を壊したやうな騒ぎでした。

此の時一羽の鴉は屋根の上に止まつて、嘴を拭ひながら、平氣で其の大騒動を見降してゐました。すると、この鴉に向つて、

「あゝ、鴉さん、あなたは何故そんな所に、ボカンとしてゐるんです？早く出掛けないと、もう敵兵が乗り込んで來ますよ！」

と叫んだのは、車の上に曳いて行かれる鶏でした。が、鴉は之に答へて、

「そんなことは俺の知つたことではない。君達は逃げたいなら逃げるが好い。だが俺は大膽に居残つてゐるんだ。君達はピフテキにされたり、吸物になつたりするが、俺はお客膳に載るやうなことは無いからね。そればかりぢやない、かうしてゐれば、新しい客から牛酪や肉片など、色々なものがいたゞけるかも知れない。まア、鶏さん、お大事にお出でなさい！」



子の鴉

と言ひました。そして鴉は本統に居残りしました。けれども敵の者共が、スモレンスキイの罫に陥つて、食物に窮しますと、鴉は忽ちその人達のスープになつてしまひました。

人も勘定高くなると、眼先の利かぬ愚者となります。幸福の罫を狙ふ者はいざとなると、鴉がスープになつたやうな目に逢ひます。

八六 建築家の狐

ある處に大層鴉の好きな獅子が居りました。けれど彼の飼つて置く鴉は、どうも殖えませんでした。それもその筈です。鴉の居る所へは自由に誰でも忍び込むことが出来ますから。ですから盗まれるのもあれば、また鴉自身が行術不明になるのもありました。これではいけ

ない、どうかして此の損害と災難とを防がねばならぬといふので、獅子は大きな鶏小舎を建てやうと思ひつきました。つまり盗賊の難も避けられ、鶏もその中にゐて自由と安心とが得られるやうな、しっかりした、具合のよいものを造らうと思つたのです。

すると、多くの者は、狐が建築の名人であることを申し上げましたので、一切の設計は狐に任せられました。始められた仕事は大層進捗つて、愈々落成しました。狐獨特の技術と努力とが残らず、其處へ加へられたので、出来上つた小舎は見るからに立派なものでした。そればかりではありません、何を見ても皆それが整つてゐるのです。先づ第一に餌ですが、それは直ぐ鼻先にあります。留り木と言へば、到る處に立てられ、寒さ避けの場所も、暑さ避けの所も、また牝鶏の巢につく場所も一切備はつてゐました。

狐は此の上ない名譽と尊敬とを得ました。また澤山のお褒美も貰ひました。聽て獅子の命によりまして、鷄共は早速新しい棲家へ移されてしまひました。所で、その變更が役立つたかと申しますと、事實はさうでなかつたのです。成程造られた庭は堅固です、塀も垣も頑丈に高く出来てゐます。が、それであつて、鷄は一日一日と減つて行くばかりでした。

どうした譯だか誰にも想像がつかせませんでした。でも好く見張りを見るといふ獅子の命令なので、見張りをしてゐますと、果して捉まつたものがあります。よくよく見れば、それは例の狐でした。

勿論狐は誰にも忍び込めないやうな建築をしたのでしたが、自分だけは這入り込むことの出来る潜り穴を拵へて置いたのです。

八七 鼠の會議

ある時鼠共が自分達の名譽を博めやうと思ひ起ちました。それは、牡猫や牝猫のゐるのも構はず、凡ての部屋番や料理番共を氣狂ひにして、その功名を穴藏から天井裏に至るまでも轟かせようといふのでした。

て、之がために會議が開かれることになりましたが、さて此の會議に列席する面々といふのは、必ず自分の身長ぐらゐ長い尻尾を持つたものでなければなりません。尻尾の長いといふことは、彼等の社會に於ては聰明と敏腕とを示す徴候とされてゐたのです。そのことの當を得てゐるか否かは、今問ふ所てはありません。のみならず私共だつて、人の智慧を判斷する場合、往々その衣服や髭に據ることが

あります。たゞ此處で言はなければならぬのは、大勢の意見によつて、尾の長い者ばかりが會議に集ることになつたことです。尻尾の短いものは、假令それが不幸にして戰場で失はれたにしても、會議には容れないのでした。何故なれば尻尾をとられたといふことは、自分の未熟又は不注意を示すものでしたから、そんな者を仲間に加へて、各自の尻尾まで失くしては大變だと思つたからです。

事の運びは着々進んで、戸外に夜の幕が降りますと、會議が召集され、そして、とう／＼大きな粉箱の中に議場が設けられました。然し、一同着席した後、ふと見渡しますと、其處に一疋の尻尾のない鼠が坐つてゐました。これを見付けた若い鼠は、隣の鼠を突つて、

「あの尻尾無しの鼠はどうして此處へ來てゐるのでせう？吾々の法律は何處へひッ込んでしまつたのでせう？あんな奴は早く摘み出す

やうに決議したら如何です。吾が國民が尻尾無しを嫌ふことはあなた方も御存じの筈です。また、自分の尻尾さへ守れない者が此處にゐたつて、何の役に立ち得るでせう？あの鼠は實に吾々の不爲となるばかりではありません、棚下の住民全體の不爲になります。」

と言ひますと、話しかけられた方の鼠は之に答へて、

「お黙りなさい、その位のことには私だつてちやんと知つてゐます。けれどもあの鼠は私の小父さんです。」

と言ひました。

八八 預言者

ある祠に、一つの木像がありました。此の木像は不思議にも、物を問へば、ちやんと立派な答をするのでした。たゞに立派な答ばかりでは

ありません、これから將來のことや、かうすればよい、あゝしてはいけな
いといふ賢い助言までして呉れました。ですから、そのお禮として献
納される金銀は、頭のでっぺんから足の先まで一面に吊されてゐます。
斯うした美しい装ひをして立つてゐますと、木像は益々色々な供物を
そなへられたり、香を焚かれたり、又色々な祈願をかけられたりするの
でした。

どんな人でも此の預言者をば全く信じて居りました。がどうした
譯か、不思議にも其の預言者が出鱈目を言ふやうになりました。物を
訊ねてもその答へが纏つてゐません。まるで取留めがないのです。
誰が行つて見ても、何の用事を持ちかけても同じこと、矢張りいゝ加減
な嘘言を言つてゐるのです。あゝ、此の木像に宿つてゐた預言の力
は何處へ行つてしまつたのだらうと、誰一人その變化に驚かぬ者はあ

りませんでした。

けれど、實際の處をたゞして見ると、それはかういふ譯でした。木像
は空洞に出来てゐて、その中へ神官が這入つては、人々に色々なことを
言つたのです。て、伶俐な神官の生きてゐるうちは、木像の言ふ事も立派
なものでしたが、その人が無くなつて、代りに馬鹿者が這入るやうにな
つたので、木像もカラ木偶になつてしまつたのです。

昔大層伶俐な裁判官があつたさうです。けれどそれは伶俐な秘
書官を抱へてゐた間だけであつたといふことです。嘘か誠か知
りませんが、私は確かにそんな話を聞きました。

八九 野獸共の疫病

怖るべき天の筈とも謂はれ、また自然界の恐慌とも謂はれる疫病が、林の中に流行しました。野獸共の呻き方は亦一入て宛ら地獄の入口がからりと開け放たれたやうでした。死といふ怪物が野山や谷々を馳せ行くと、それにつれて犠牲者が續々倒れて行きます。つまり惨忍な死神が草を刈るやうに彼等を薙ぎ倒して行くのです。一方生きてゐる者は死神を鼻先に見ながら生きた心地も無く、うろくしてゐました。

この恐怖の爲に野獸共の氣質がまるツきり一變してしまひました。あれ程威勢を示してゐた野獸共も、此の大きな災難に遇つては舊の面影はありません。狼は羊を見ても捉へません。そして隠者のやうに

温順です。また狐は鶏と和して、穴の中で断食してゐます。彼等はてんで物を食べやうなどいふ氣が出ないのです。さうかと思ふと、こちらでは鳩の雌雄が仲違ひになつて、愛などいふものはてんで念頭から抜けてしまひました。しかし愛がなくて何の樂しみがありません。

此の災難の最中あらゆる野獸共を議會に召集したのが獅子であります。野獸共はわづかに生氣を保つてゐるだけですから、ふらくらく集つて来て、黙つて王様のめぐりを取りましました。そしてがなく坐つたまゝ、眼玉をきよふつかせて聴き耳をたてゝゐました。

「あゝ皆さん。」獅子は口を開きました。

「吾々は多くの罪を犯したゝめに、怖るべき神の怒を招きました。ですから吾々の中で誰よりも餘計罪ある者を、その者の心からして神々

に犠牲に献げませう。さうしたならば、或は神々の御機嫌を直すことが出来るかも知れません。いや吾々の熱い神信心によつて、神の怒は必ずや和らぐに相違ありません。わが親愛なる同胞よ、かうした真心から出た犠牲の例が歴史の上に多々あることは、諸君のよく知らるゝ通りです。……ですから、各々自分の心を落ちつけて、皆此の場で片ツ端から高らかに懺悔致しませう。何時何處で何んな罪を犯したか、またそれは自分の心から出たことか、若しくは止むなくした事か、一切告白することに致しませう。皆さん、どうか懺悔して下さい……。第一に私が懺悔致します、——あゝこれは言ふも苦しい事ですが、打明けてしまひます、——私は罪人です、いつぞや見るも痛いけな羊共を、何のいはれもなく、恣に引裂いてしまひました。また時には罪咎もない牧者を殺したこともありませう。ですから私は厭ふことなく犠牲になりま

す。——けれども最初は皆一緒に自分の罪を數へあげる方が宜しいでせう。さうして行つて、一番餘計罪のあつた者を犠牲に捧げるとしませう。その方が神々の御旨にも適ふこととせうから。』

此の時狐が言ひ始めました。

『王様々々、わが善良なる王様あなたはお心が優し過ぎて、その位の事を罪に數へ上げるのです。若しも私共が一々臆病な良心の命に従つてゐたならば、仕舞には飢え死にをしなければなりません。そればかりではありません、どうぞお聞き下さい。あなたが羊共をお食りになつたといふことは、彼等にとつては此の上ない光榮です。それから又牧者に関する一件ですが、これに就いては私共はあなたにお禮を申上げねばなりません。彼等をば時々さうして致へる方がよいのです。本

の中などにも到る處に萬物の長だなんて書いてゐます。」

狐が言ひ終ると、それに續いて他のお諮らひ連が皆異口同音に獅子を讚美し始め、我れ先にと争つて、獅子の懺悔の無用なことを證明しやうとしました。

獅子の次に熊、それから虎、狼と、それ／＼大勢の前へ自分の罪を告白しました。然し彼等の非道なる行爲に就いては、誰一人難癖つける者がありませんでした。そして、爪なり齒なり、兎に角、力強い者は四方から正當と認められました。雷に正當と認められたばかりでなく、何うかすると聖者とまで讚美されるほどでした。

順番が來たので、温和しい牛も皆の前にもう／＼唸り出しました。

「私も罪人です。五年程前のことですが、冬の餌食が足りなくて、誰からも借りる譯にも行かず、ふとした出来心から、坊さんの所の稻村の枯

草を一と束盗みました。」

此の言葉を聞くと、一時に大聲と騒ぎとが持揚りました。熊や虎や狐は嗷鳴り立てました。

「見ろ、かういふ太い奴が居るのだ。他人の枯草を食ふなんて不埒な奴だ。吾々がひどい神の仕置きに逢つたといふのも全く此の牛の不埒の所爲だ！此んな亂暴な奴は角のついてる頭ごと神々へ献げて、その惡戯のお詫びとし、さうして吾々の生命だけでも助かるやうにしなさいアならぬ。そして疫病が傳染しないやうにして貰はなさいアならぬ。本當にこんな罪があつたからこそ、此の地に疫病などがはやつたのだ！」

牛はとう／＼死刑の宣告を受けて、焚火の上に載せられました。

人間社會にも亦かういふことが言はれて居ります。溫和しくして居れば、その者が罪を着ると。

九〇 小川

一人の牧者が小川のほとりて遺瀨ない悲しい思ひを——取りかへしのつかぬ損害を——歌に歌つてゐました。といふのは他でもありません。彼の愛してゐた羊の子が四五日前河に溺れて死んだのでした。すると、一つの小川が牧者の聲を聞きつけて憤然として河に言ひました。

「貪慾なる河よ、若しもお前の河底が浅くて、俺の河床のやうに、凡ての者のために開放されてあつたら何うする？ お前が斯うも貪慾に呑み込む犠牲は、悉く、その泥だらけの底に見出さるゝてはないか？ お前

みたいな者は愧ぢて地中に潜り込み、暗い——深みに身を隠しさうなものだと思ふ。俺が若しそのやうな澤山の水量を天から授かつたとすれば、その時は自然界の飾りとなるだけで、決して鶏一羽だも害するやうなことはしないぞ。俺の水が人家の直ぐ側や小さい藪のほとりを流れる様を見ろ、此の通り温順しいのだ！俺はまた谷間や草原を新鮮にこそすれ、決してその葉一枚だも持ち去ることはない。一と口に言へば、俺の水は海に注ぐまで銀のやうに清い流れを續けて、その途中如何なる處に於ても、椿事や災難や、残忍な事を醸すことなく、ほんとに善い事ばかりをしてゐるのだ。」

小川は斯う言ひました。また實際斯う思つてゐたのです。所が如何てせう。一週間も経たないうちに、黒雲が附近の山を蔽ふて、ひどい雨を降らせました。それがために小川の水量は増して、急に大河と匹

敵するやうになりました。それと同時に、彼の淑やかさは何處へやら葬り去られ、水は濁流となつて、兩岸から溢れ出し、汚い泡を渦かせながら、えらい勢で走りました。それがために千年木とも言はれてゐた樫の木などは根こぎにされ、その倒れる音が遠くの方まで聞ゆる始末でした。そればかりではありません。過ぐる日小川から同情をかけられて、頻りと河に向つて御叮嚀な悪口を言つて貰つた、あの牧者などは、その水に押し流されて、自分の家畜もろとも死んでしまひました。そして彼の家も跡方なく失せてしまひました。

多くの小川が徐かに滑かに流れて、そして心地よい囁きを發するといふのも、それは全く水の少いたためです！

九一 鴉の子

ある時一羽の鴉が天から家畜の群に降りて来て、一匹の羊の子を攫ひました。するとその近くで之を視てゐた鴉の子は羨しくなつて、こんなことを考へました。

「あいつ、甘いことをしとるぞ！ あゝすれば何も足の爪を汚すことはないわい。だが、今見る所によると、鴉のうちにも拙い奴がある。家畜のうちには羊の子ばかりゐるわけではあるまい。俺が飛びかゝつて取る段になると、本當に一番よいのを攫つて見せる！」

言ふより早く、鴉の子は飛び立つて、家畜の群に胴慾な視線を投げました。そして、無数の羊や、山羊や、その子の中から、吟味に吟味を重ねて漸く一頭の牡羊を選びました。所が、その牡羊といふのは、素敵に肥え

た巨きな奴で、まア、可也の狼でもなければ、逆も齒に合ひさうもないのでした。

鴉の子は、頃を見澄まして、其の羊に飛び降りて、一生懸命その毛の中へ喰ひ入りましたが、その時始めて力に餘る獲物だといふことが解りました。何より都合の悪いのは、その羊が並外れて毛深く、おまけにもじや、ぐと纏れてゐたことであります。てすから、物好きな子鴉は一旦立てた爪をその中から引抜くことが出来ません。で、とうとう自分が生擒にされてしまひました。牧者は羊の毛の中からそつと鴉の子をとつて、飛べないやうに翼を剪み、そして子供達のおもちやに呉れてやりました。

人々の間にも往々之と同じことが演ぜられます。それは小さな

悪漢が大きな悪漢の真似をしやうとするから、彼等の手が伸びるか、はりに、却つて殴られてしまひます。

九二 音楽家

ある人がその隣の人を晩餐に招きました。それにはまだ別に考へがあるのです。といふのは、此の主人大變に音楽を愛する人でした。から、隣の人も呼んで、一緒に音楽家の歌を聴かうとしたのです。やがて名人達は歌ひ始めました。ある者は丸太のやうな聲を出し、或る者は薪のやうな聲を出し、何れも力のありつたけ嗷鳴りました。客の耳はガーンと言ひました。そして眼が廻りました。

「君、いゝ加減に助けて呉れ給へ。これは逆も樂む所の沙汰ではない！ 君の唱歌隊は出鱈目に嗷鳴つてゐるだけだ。」

客人が怪訝な顔をしてかう言ひますと、主人は感動したやうな顔をしてかう答へました。

「さう思ふのも無理はない。彼等は少々力を入れ過ぎてゐるから。それがため酔人の口には合はなかつたのだ。だが何れも揃つて立派な技倆だわい。」

しかし私はかう言ひます。飲むのも宜しいが、物の黒白をも見分けなければ駄目だと。

九三草花

ある一つの草花が、森の中で急に弱り出し、半分ばかりは殆んど萎びかゝりました。そして、莖の所からぐんにやりと頭垂れてはかなくも

その最期を待つばかりでした。

そこで彼はあはれな聲を出して神様に願ひました。

「あゝ神様、どうぞ早く晝にして下さい。そして紅い太陽に此の野邊をも照らさして下さい。さうしたら私の生命は或は蘇るかも知れません！」

すると、その近くで何か堀つてゐた甲蟲が、その草花に言ひました。

「あい、あい。お前もくだらぬ奴だなア！お前は何か自分の育つのも、枯れるのもまた榮えるのも、皆其處に太陽の手が加はると思つてゐるのか？さうぢやない、太陽には少しもそんな心はないのだよ。全體お前は私のやうに飛ぶことが出来ないから、世間を廣く見たことがない。従つて解らないのも無理はないが、實はかうなんだ。此の土地で太陽に育まれ、たゞ太陽によつて幸ひを受けてゐるものは、草原と田

畑とだけだ。太陽はまた自分の暖気で巨きな樫の木や杉などを暖め
 そして驚くべき美しさで香ばしい花を飾る。同じく花と言つてもそ
 れ等の花は全くお前なんかとは譯がちがふ。彼等の品位と美しさと
 がどの位なものであるかは、その花時に草刈りする人達が皆之を惜し
 がるのでも解らう。だが、お前などは見榮えもせず、香氣もないぢやな
 いか。だからお前のやうな者は滅多なお願ひをして、太陽を苦めては
 ならぬ！ どうせ太陽はお前などにその光線を投げかけはしないよ。
 だからお前は無理な算段をしない方がよい。そして黙つて枯れて了
 へばいゝのだ！」

然し太陽は登つて、自然界を隈なく照らししました。そして絹絲のや
 うな光線を世界中へ撒きました。あはれな草花は、夜中に萎びかゝり
 ましたが、再び天の恵みに依て蘇生へることが出来ました。

九四 森と火

友を選ぶにはよく相手を見分けることが肝腎です。若しも我々の
 の友誼に私慾がからまるならば却つて自分の爲めに陥し穴を掘
 るやうなものです。此の眞理をもつと平たく解しやうと思つた
 ら、私の寓話を聞いて下さい。

冬のある日、小さな火が森の傍で燻ぶつてゐました。見受ける所、そ
 れは通行人に遺棄されたものらしく思はれました。火の勢は刻一刻
 と弱くなつて行きました。と言つて、新しい薪がある譯ではありませ
 んから、此の火は本統に燃えてゐるといふ名ばかりでした。
 そこで彼は、自分の最期を見てとりまして、森に向つてかう言ひまし

た。

「森さん、一寸お訊ねしますが、あなたの運命位悲惨なものはありませんねえ。木の葉一枚も身につけず、まる裸で凍へてゐるではありませんか。これはまたどうした所以なのですか？」

「その譯ですか。つまり此の通り全身雪に埋れてゐますから、冬の間は繁むことも花を開くことも出来ないのです。」

森が斯う言つて答へますと、火はまた之に續けて言ひました。

「何だ、その位のことですか。それはなんでもありません。私と親しくさへして下されば、私が宜いやうに助けて上げます。私は太陽の兄弟ですから、冬の間でも、太陽以上に奇蹟を行ふことが出来ます。嘘だと思ひなら、温室へ行つて訊いて御覧なさい。冬の而も周圍中が雪で、吹雪が吹き荒れてゐる時でも、その中では何時も花が咲き、實が熟し

てゐますよ。それは誰のお蔭だと思ひます。全く私のお蔭ではありませんか。自分から自分を讃めるのは安當ではありませんが、いや私は自慢が大嫌ひなんです、けれども、力の點に於ては私は決して太陽に譲りません。あの太陽がどんなに大威張りに光つて見た所で、やつぱり此の雪をばどうすることも出来ません。ですから雪には手をつけずに、西の端へひッ込んだてはありませんか。所が私の身のまはりと來たら如何です、此の通り雪が融けてゐますよ。ですから夏や春のやうに繁りたいと思ひならば、私をあなたの所へ置いて御覧なさい！」

火の言つた通りに、事が運ばれました。小さな火は森の中に入れられて、漸く火らしくなりました。それから彼は一生懸命精を出して、太い枝や小枝を走せ廻りました。と黒煙は隙々と空高く立ちのぼり、見るも怖ろしい火焰は忽ち森全體を包んでしまひました。そして一切

が灰と化してしまひました。

曾て夏の暑い日に通行人が寄り集まつて、暑さを避けた緑の樹蔭も今はたゞ焼け残りの切り株が黒く突ツ立つてゐるばかりとなりました。

だが、何もそれに不思議はありません。森と火とが仲よくなつたのですから。

九五 多妻者

むかし、或る所に品行の善くない人がをりました。ちやんと妻の生きてるうちに、まだ二人の妻を持ちました。

所がその國の王様は非常に嚴格なお方で、そのやうな大罪を大目に見通すやうな人ではありませんでした。てすからその噂が、天聽に達

しますと、王様は早速その多妻者を裁判に附することをお命じになりました。そればかりでなく、二度とこのやうな事のないやうに、人民をして深く感じしめる必要があるといふので、最も重い刑罰を考へさせました。

「若しその刑罰が輕過ぎたと思はれる場合には、此の事件に與つた凡ての裁判官を立ち所に絞殺する！」

かういふ仰せてありました。裁判官等に取りましては、ちよつとやそつとの冗談ではありません。誰も皆之を承はつて冷汗をかきました。

さて、犯人に對して如何なる刑罰を案じ出したらよからうか、それに就いて、裁判官等は三日三晩熟議をこらしめました。刑罰の種類は何千といふ程ありましたけれど、經驗に徴して見るに、そのうちの何れも人

民に悪事を思ひ切らすやうなものではありませんでした。然し神の助けが加はつたものか、彼等は遂々よい刑罰に思ひあたりました。犯人は法庭に引き出されました。そして一同の議決として判決文が讀み上げられました。それは、三人の妻を皆彼に引渡すべしといふのでした。

人民は此の裁判を見て皆驚きました。そして、今にも王様が裁判官を皆絞殺せしめるであらうと待ち設けておりました。所が四日と経たぬうちに、例の多妻者は恥ぢて縊死を遂げました。そこで此の宣告は非常に怖ろしいものとされ、其の事があつてからは、此の國には一人の多妻者も出ませんでした。

九六 樽

一人の人が、その友人にお願いして、一個の樽を三日ばかり借り受けました。友達の間柄に於ては助けを與へるといふ事が、一番貴いことです。とは言へ、これが若し金銭上の問題であつたならば、話が違ひます。兎角金のことになりますと、友情はそつち退けにされて、拒絶することがあり勝ちです。けれども、樽は貸した所で損にはなりません。歸つて来ればまた、それに水を入れて運ぶことが出来ます。

本統にさう行けば結構なんですが、此場合には拙いことが出来しました。と言ふのは他でもありません。借用人がその樽を持つて行つたのは、酒を容れるためでした。で、かれこれ二日の間酒が盛られてありましたから、その樽には酒の香が限なく着いてしまひました。搗てて加へて酸酒だか麥酒だか、また何か別の飲物だか、そんな香もついておりました。

持主は約一年間程此の樽について苦心しました。そして色んなものを容れて見ましたが、矢つ張り酒の香は抜けません。それがために其人はとうとう此の樽を捨て、しまひました。

父たる人々よ、此の寓話を讀んだなら忘れないやうにして下さい。幼い時に有害な事を教へると、それが唯の一回であつても大變なことになるります。あとでその者のあらゆる行爲と仕事とに現はれて來ます。その場合口先で何と言つたつて、それはもう駄目です。

九七 主人と鼠

たとひ家のうちに泥棒を働く者があつても、その窃盜の證據が無

い時には、餘程氣をつけねばなりません。萬が一間違つて、誰彼の差別なく、凡ての者を一樣に嘯鳴りつけたり、又は處罰するやうなことがあると、泥棒に對しては少しも制裁にならず、また矯正にもなりません。そればかりではなく、善良なる家僕をも屋敷から逃走させ、終には小さな不幸から大きな大きな災難に逢ふことゝなります。

ある商人が幾つもの土蔵を建て、その中に食品をみんな積み込みました。そして、一方には鼠の害を受けないやうに、猫の一隊を備へました。

主人も是れて安心しました。夜も晝も、ちやんと見張番がついてゐますから。それだけならば結構でしたが、こゝに一と悶着持ちあがりま

した。それは他でもありません、見張番をする者のうちに泥棒が現はれたといふのです。吾々人間の社會に於ても、監督者の間に時として不正事件が起ります。(これを知らない者はありますまい。)ましてこれは猫の群です。

所が主人は、どうにかして泥棒を探り出し、之をいたく罰すると同時に、正しい者をば一層大切にしたい心から、猫共全體を鞭打つことを命じました。此の奇抜な宣告を聞いた猫共は、正しい者も、不正な者も、皆急いで屋敷を去りました。

商人の家には猫が居なくなりました。が鼠の方では其の時機を待つてゐたのでした。さて望み通りに猫がゐなくなりましたから、彼等は早速土藏を襲ひました。そして二三週間のうちに、悉くの品物を食ひ荒してしまひました。

九八 狼の親子

ある狼が、その子に向つて、父と同じ職業で暮すことを教へました。そして彼を獨りて散歩に遣りました。同時に又幸福にありつけさうな場所を氣をつけて探して来るやうに言ひつけました。それはどういふことかと言ふに、牧者の手から朝飯なり、晝飯なりをいたゞかして貰ふやうな所はないか、それを探して来ることでした。

やがて、修業中の子狼は家へ歸つて來ました。「早く私と一緒にいてなさい!晝飯がちやんと出來てゐます。あの位確かなものはありません。ほら向ふの山の麓に見えてせう、羊の群の飼つてあるのが、あれですよ。どれもみな一粒選りの肥り方です。あんなに數へ切れぬ程澤山ゐるので、たゞ取つて來て食ふ

だけですよ。」

と、かう言ひますと、親狼は之に言ひました。

「待て、先づ第一に、牧群を守つてゐる牧者がどんな人間であるかを知らなければならぬ。」

「あ、牧者ですか、牧者は伶俐で、機敏で、悪くない人だといふことです。けれど私はあの牧群をひと廻りして、犬の居るのを見届けましたが、その犬共が丸て瘦せ、衰へた溫和しいの、るまのやうです。から大丈夫だらうと思ひます。」

「そんな風ではあまり行く氣にもなれない。」と年老いた狼が言ひました。——「若しも實際、牧者が愚鈍でないとするならば、その人が愚鈍な犬を持つてゐる筈がない。そんな所へ行くと、忽ち非道い目に逢つてしまふよ！それよりも俺がよい所へ連れて行かう。そこならば先づ

生命に心配はない。無論その牧群にも、多くの犬がつけてあるけれど、何しろ牧者が馬鹿だから大丈夫だ。凡そ馬鹿な牧者の居る所にはまた馬鹿な犬共が居るものだ。」

九九 牝鹿と行者

一匹の若い牝鹿が、可愛い、自分の赤子を失つて、まだ乳の張り切つた乳房を持つてゐる頃、林の中で二匹の小さい狼の子を見つけました。牝鹿はそれを拾ひとつて、自分の乳を呉れながら、神聖な母の務めをしてゐました。

すると、一緒に住んでゐた行者が、その牝鹿の行爲に驚いて、

「あなた、無分別なことをなさいますな。あなたの勤つてゐる者は何だと思ひます。あなたが自分の乳を興へてゐる者は何だと思ひます。」

「それとも、あなたは彼等の族からお禮でも貰はうといふのですか？ いや、それはさて置き、何時彼等があなたの血を流すか知れませんよ。あなたは彼等の猛悪な心を知らないのですか？」

かう言はれて、牝鹿は次のやうに答へました。

「それは血を流されることがあるかも知れません。けれども私はそんなことを考へては居りません。また考へたくもありません。私は今の所、母の情——ただこれだけを考へてゐるのです。言はゞ、私に育てる者が失くなつた時、私の乳が私に斯うさせたのです。」

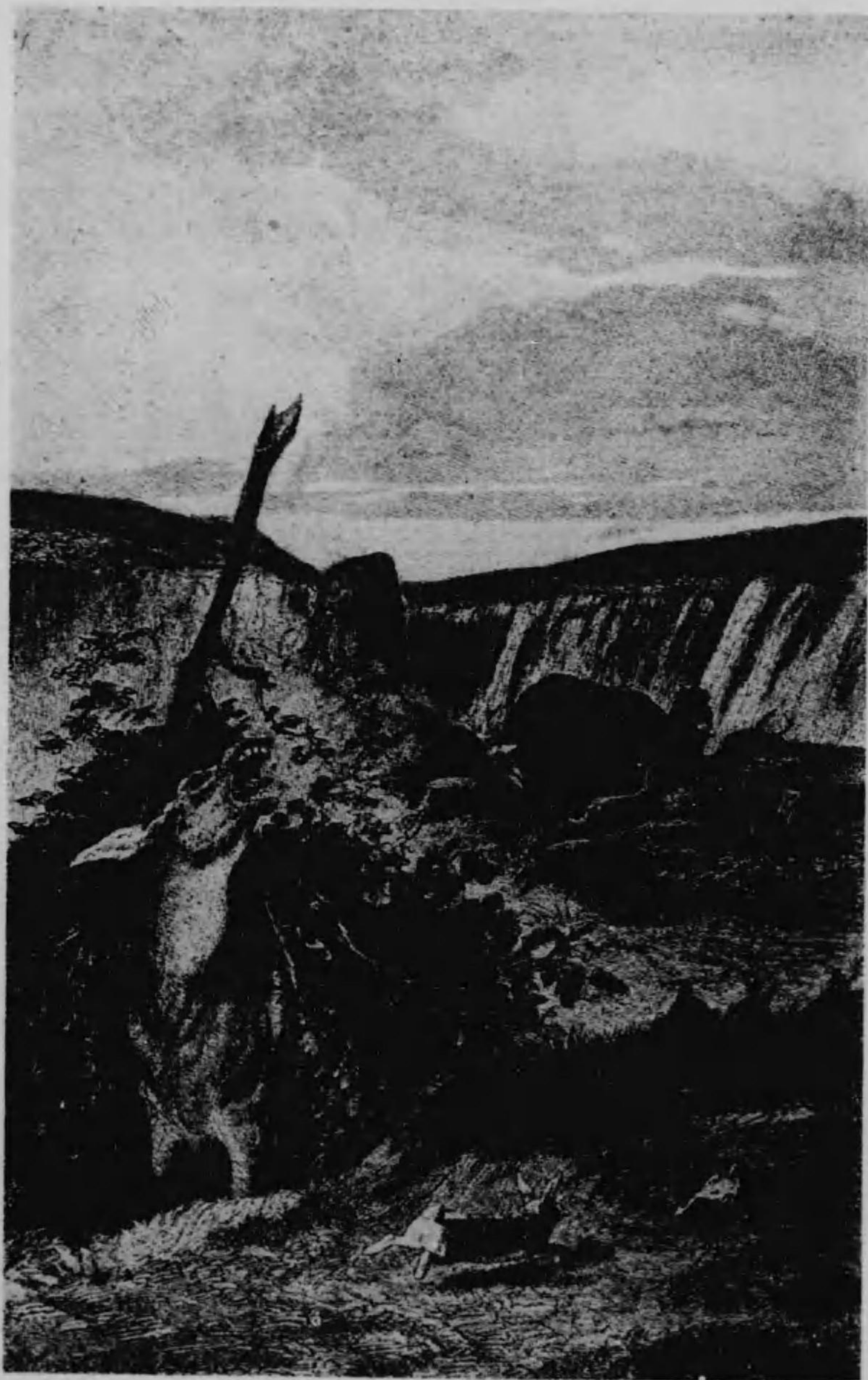
斯のやうに、眞の慈愛は何等の報酬なしに善事を行ひます。善人が若しもその有り餘る善を近い者に分たないならば、彼はこれが爲めに却つて苦悶を受けるてせう。

一〇〇 犬

ある旦那の所に悪戯をする犬が居りました。此の犬は何事につけ些しも不足はなかつたのですから、他の犬ならば此のやうな暮しを以て満足し、且つ幸福と感じて、決して盗みの心など起すことはありません。それなのに此の犬には悪い癖がありました。肉類さへ見ると、直ぐ盗まふとしますので。

主人は之に就いては随分苦心しましたが、一向直すことが出来ませんでした。けれどもそのうちに友人が中へ這入つて、助言して呉れたので、漸く成功しました。その友人の助言はかうでした。

「君能く聴き給へ。君は成程嚴格のやうではあるが、君の遣方では唯犬に盗みを教へ込むやうなものだ。何故ならば、君はいつも盗んだ品



馬 驢

を興つてしまふからさ。しかし君、これから先は打つことは少なくてよ
いから、必ず盗んだ品を奪り上げるやうにして見給へ。」
果せる哉、犬は此の聰明なる助言を身に味はつて、びつたり悪戯を止
めました。

一〇一 風

雲の下まで揚げられた風が、ずつと眼下を見降して、とある谷間に一
つの蝶々を見付け、

「あーい、かう言つても本気にすまいか、知れないが、お前の姿がやつと
見える位だ。どうだ、こんなに高く飛ぶのを見たら、羨ましいだらう。」
と叫びました。すると蝶々はかう言つて答へました。

「羨しい？ 冗談言つちやいけな。何が羨しいものか？ お前は自分

のこゝを大變たいへんをらさうに思おもつてゐるけれど、それは何なんにもなりやしないよ。幾許いげん高たかいたつて、お前まへは縛しばられて飛とんでゐるのぢやないか。そんな生活せいごは、幸福しあふとは大分だいぶかけ離はなれてゐるよ。そこへ行いくと、俺おれなどは高たかくはない。高たかくはないけれど、自みづか分の思おもふ所ところへ飛とんで行いく。そればかりか、お前まへ見みたいに他人たにんの慰なぐさみとなつて、あつたら一生いっせいを棒ぼうに振ふる者ものとはわけが違ちがふ。」

一〇二 驢馬

ひかし、ユピテルといふ神かみ様が、色いろんな生物せいぶつを造つくつて、これを世界せかい中に棲すままはせることにした時とき、驢馬ろばも亦また此この世よに造つくり出だされた。所ところが、さういふ忙いそしい時ときなので、手て落ちおちがあつたものか、又は神かみ様の御ご心こゝろで故意こゝろとさうしたのか、鬼おにに角造かくぞうり出だされた驢馬ろばは、まるで栗鼠りす位くらい

の小ッぽけな動物でした。てすから、驢馬がいくら威張つて見た所で誰の注意をも惹きません。驢馬は大きくなりたくて堪りませんが、それと言つて如何にも致し方がありませんでした。しかしこんな體格をしてゐては、恥づかしくツて世間へ出られません。そこで此の高慢な驢馬は、ユピテルの所へ行つてもつと脊を高くして貰ふやうにお願ひをしました。

「神様私は逆も我慢が出来ません。獅子だとか、豹だとか、象だとか言ふ動物は何處へ行つても大變な尊敬を受けてゐます。が、私と來たらまるで罰でも當てられたやうにみじめな體です。てすから誰も私を尊んで呉れず、また私のことを少しも吹聴して呉れません。せめて私に犢位の脊がありましたら、獅子や豹にも増して、世間から噂されるに違ひありません。何卒神様、その所を憫れんで下さいまし。」

驢馬は一日経ちますと、丁度これと同じことを、ゼヴスといふ神様に向つて祈りました。その祈り聲があまりに五月蠅かつたので、ゼヴスといふ神様は到頭これを聴き届けました。

そこで驢馬は大變大きな動物にして貰ひました。が、只體を大きくして貰つたばかりではなく、變な聲をも與へられました。大耳のヘラクレスがその聲をきいて、

「おや、何んていふ猛獸の聲だらう？どんな獸だらう？きつと齒の鋭い角の澤山ある畜生にちがひない。」

と、林の者共に言つてきかせました。すると、それからといふものは寄ると觸ると驢馬の話を持ち切りでした。が、だんく月日が経つて見ますと、驢馬が何んなものかといふことが誰にも解つて來ました。て、驢馬は馬鹿者といふ綽名を貰ひ、遂には水を運ばせられる者となつ

てしまひました。

三 イズマイロフ物語

一 象と犬

ブルイランといふ肥犬がある時豚と摺合を始め泥濘の中を轉げ廻つて闘ひましたが、相手が相手にすから散々敵を噛みつけて血塗れにしました。やがて豚がぼろ／＼の體で逃去りますと、ブルイラン鼻を動めかしながら、

「諸君何うだ。我輩の牙の斬れ味を知つたか。永久ブルイランの名を忘れ給ふな。」

友の犬共は皆彼を賞讃して喜びました。瘦せぎすのプレツは尾を振りながら、

「あゝブルイラン！ なかく鮮やかなお手際だね。君は我が黨の勇士だ。おゝ我が友！ 君はよく我が黨の名譽を輝かしてくれた！」

と言ひました。すると小犬共も、

「あゝブルイラン！ 豚軍討伐の英雄！」

と叫ぶのでした。

此の時ブルイランは皆の者に向ひ、

「我輩は將に豚の尻尾を噛み切らうとしたのだ。豚をやつつけたからには、象と戦つても負けはせんぞ。象の野郎圖體こそぶくくしてやがるけれど、何豚の親類だ！ 或は親類でないかも知れんが、恐るゝには足らん。進め！ 我が黨の士！ 彼奴今時分は慥かに水飲みに来てるに違ひない。それ進め！ ウオルインの館に向つて進め！」

と嚴かに宣べました。

犬共はブルイランの後に續いて駆けて行きました。象を一瞥見ると、忽ちふるへあがり、狼狽してゐました。

と、ブルイランは象に向つて、

「やい、此の肥太奴、止まれ！ 手前のやうなものに敗を取るやうな犬様とは違ふぞ。」

と叫びました。

「それなら何んな犬様だ？」

「文句は要らねえ、早く降参をしる。此の馬鹿野郎、左もなくば決闘だぞ。そして六週間も物置に打込んで置くぞ！」

「ふん、出来るなら遣つて見ろ、貴様達に何が出来る。牙にても引懸つて空中に跳ね飛ばされぬやうに氣を附ける。」

「おや、威張つて居やがる。怪しからん奴だ。此の犬様に向つて何を

吐す。早くお詫びをせい！そしてその罰として俺の家来になれ！俺が誰を罰しろと言つたら其奴を罰し之を舐ずれと言つたら其品を舐めざるやうに、萬事俺の命令に服従しろ！」

「何舐めずると？」

と言つて象は憤激のあまり、瞬間にブルイランを鼻に懸けて、鐵網から壕の中へ投げ込んでしまひました。

おや、ブルイランが居なくなつた！と見れば、彼はむづぐり蓬の間から現はれました。さてプレツの方は何うしたかといふに彼はあれ程のお饒舌でありながら、狡猾な墮者のやうになり、且つ事の是非を能く辨へてゐたから、怒りの色も現はさず、小犬に先つて退却しました。

犬の腕力がどれ程強くとも、到底象には叶ひません。縦し争ふことがあつても、象などには手出しをしない方がよいのです。

二 猫と鼠

ある商人の家に大層肥満つた猫が居りましたが、その肥満つたのは何も不思議はありません。此の猫は朝から晩まで、晩から朝まで、たゞもう寝たり食べたりしてゐるばかりで、鼠などはふり返つても見ませんでした。従つて鼠共の方でも少しも猫を怖れません、悠々と天井裏に居城を構へてゐました。けれどそれが全く猫の温和しい蔭であるとは感じなかつたので、恩知らずの鼠共はいつも猫を嘲笑つては馬鹿よ阿房よと言つてゐました。

ある時、此の猫が腹一杯物を食べて、さて一と休みして來ようといふので、鼠共のゐる天井裏へ行きましました。そしてくらくと丸くなつて寝てゐました。

すると如何でせう？鼠共は平和を妨げられたといふので、大騒動を起し、天井板の揺れる程騒ぎ廻りました。それでも猫は凝と寝てゐました。そこで鼠共は、此の猫が自分達を怖れてゐるのだと思ひどたばた／＼、チ／＼／＼、大きな聲で猫の悪口を叩きました。それでも猫は凝つとしてゐます。まるで彼等の言葉も耳に入らないかのやうに。すると、一番殿めしい髭を生やし、七寸もある長い尻尾を持つた一疋の活潑な鼠が、皆の者にかう叫びました。

「どうだい、此の猫をやつつけてしまはうぢやないか。そして食べてしまはう。見る、あの通り肥満つてゐて美味さうだ。ほんとにいゝ、食になる。さア／＼何も遠慮することはない。早速とりかゝらう！そこでだ吾々のうち一番勇氣のある者が猫の鼻を噛るんだぞ。さア續いて来い、進め／＼、何も怖いことはない！」

かう言つて、その鼠は眞ッ先に立ち、猫に向つて突進しました。續いて他の鼠も皆突撃しました。

此の時猫は何うしたと思ひます？言ふまでもなく、格闘と心を定め、びよんとはね起きて、全身を頸木のやうに曲げ、毛を逆立て、眼玉をギロ／＼と光らせました。そして爪と齒とを働かして、さしにも長い鼠の行列を瞬く間に蹂躪つてしまひました。鼠共は狼狽して大混雑を演じ、ち／＼／＼ばら／＼逃げまどひましたが、中には捕虜となつて赦免を願つてゐるものもありました。けれど猫は決してその無禮を許しませんでした。そして凡ての鼠共を山のやうに積みあげました。

冗談もいゝ加減にして置かぬと酷い目に逢ふものです。本當に温和しい人は長い間侮辱を耐えてゐるでせう。けれど若し其の

人の勘忍袋が破れた時には、不禮者はよいこらしめを與へられま
す。

三二正の海老

「貴様は後へばかり退つてゐるではないか。馬鹿だなア、何處へ行く
つもりだ。さア、前へ歩いて見ろ、前の方へ！言ふことを聽かないと
厭だ！」

と言つて、海老の親爺がその子を叱りました。すると子の答はかう
でした。

「ですからお父さん、私に歩いて見せて下さい。何ういふ風に歩けば
好いのです。お父さん、たつた一度でいいから教へて下さい。私は直
ぐ覺えます。さアお父さん始めて下さい。私も後れずに行きますか
ら。」

ら。」

酒を飲んだのが悪いと言つて、旦那さんが、その召使を打擲します。
けれどさ、ッぱりその効果がありません。——何故てせう？それは
旦那自身が酒を飲んでゐるからです。

四二人の百姓と雲

ある時、アガホンといふ一人の百姓が木の葉の動くのを見て眞蒼に
なりど、
く顔へながら隣の人に言ひました。

「アントンさん、あれ御覽なせい、黒雲が此方の方へ遣つて来るだよ！」
隣の人は斯う答へました。

「來れば何うだつて言ふだ？」

「何うだつて、お前さん、霰が降りまさら。そして俺達の穀物を打ッ潰してしまふだよ。さうなりや秋作も春蒔もみな駄目になツちまふ。飢饉年になるだ。そして疫病が……」

「詰らねえ事を言ふなよ、おい。お前も下らねえ事を考へるぢやねえか！ 霰でなくて雨が降るかも知れねえ。いや、もう長い間雨が無かつたから、今度こそはぼつ／＼落ちて来るに違え無え。さうなりや穀物も勢がつひて来る！ 俺達はそれを取り入れて、どツさり賣ることが出来る。そして濁酒でも何でもしこたま醸つて、冬になつても飲めや遊べと浮れてゐられるだ！ あゝ雨が降つて呉ればいいなア。」

「だが御覧なせい、今霰が降つて来るだから！」

「いゝや、雨が降る。」

「いゝや、霰だ！」

「雨だつてば、もう文句言ふことはわえよ。」

「何言ッてるだい、お前の方が馬鹿なことを言ふぢやねえか！」

アントンは馬鹿と言はれて怒つてしまひ、相手の頭をぼかりとやりました。すると、アガホンの方でも相手の耳の邊をぼかり。とう／＼喧嘩になつてしまひました。

霰も雨もまだ降らぬ先に、二人の顔からは血が流れる始末でした。さうかうしてゐるうちに、黒雲はすう／＼と通り過ぎてしまひました。

五 穴藏の猫

「まア／＼大變ですよ、あなた。今日私が穴藏の戸を開けて見ましたら、足下から大きな尻尾の長い鼠が二匹飛び出して、私、びく／＼してしまひました……甘酒などの壺はもう横になつてゐますよ。かうして

置いたら鼠に生命を縮められてしまひます。捕鼠器でも買つて來ませうか？

でッぷりと太つた主婦がその夫にかう言ひました。すると夫は答へました。

「それが、お金の無駄遣ひといふものだ！家には猫が幾匹居ると思ふ？あれを残らず連れて行つて、穴藏の中に押込めて置けばいい。さうすれば鼠をみな食つてしまふ。」

妻は夫の言ふ通りに猫共を穴藏につれて行つて閉ぢ込めました。

さて、翌朝行つて見ますと、彼女は一層驚いてしまひました。三毛猫は甘酒の樽に寄りかゝつて舐めずつてゐるし、白猫は生肉の一部分を片附けてゐるし、小猫共は鳥肉や獸肉を引摺りまはつてゐるし、壺でも樽でも大概横倒しになつてゐました。

「まア仕様のない畜生だ！よし、かうしてやるから思ひ知れ！」

言ひながら主婦は鍵の束を掴んでゐる手をぶる／＼と顛はせました。そして、その手を振りまはすのでした。猫共は忽ち姿を消してしまひましたが、あばれてゐる女の方は氷の上へすとんと轉んだまゝ、半時間ばかりは腰が立ちませんでした。

やがて、彼女は夫の所へ來て、そのことを訴へ、猫共を仕置きするやうに願ひました。夫は一寸考へてから之に就いてかう言ひました。

「猫も宜しくないが、吾々とても正當ではなかつた。だから此度は猫を一匹だけ穴藏へ入れて置けばよい。一匹ならそれ程の悪戯はすまい。それからお前に言つて置くが、その猫にはよく食物を配つて遣るがいい。さうすれば、盗み喰ひなどしやしないから。」

六 和尚と百姓

バラモンといふ一人の百姓が和尚さんの所へ来て、地面を舐める程平身低頭して、涙と溜息とを洩らしながら、かう訴へました。

「和尚様、私の家では怨霊が出て仕方がないのですが、何うしたら逐ッ拂ふことが出来るでせう？ どうぞ助けると思つて教へて下さい。」

「それでは、バラモンさん、十字の印を描いたら宜いてせう！」

「えい、十字の印ならもう澤山描きました。そればかりではありません、暮方になると祈禱を始めますが、怨霊は矢張り私を壓えつけてゐるのです。そして私は一と晩中その怨霊と闘つてゐます。まあ、聴き下さい。夜分私が仰向きに寝て居ますと、何時の間にか怨霊が出て来て、私の上に載つかります。その重たい事と言つたら、丸て粉袋か鹽

俵をのせられたやうです。眞實です、決して私は嘘などとは言ひません。それで私は手を動かすことも聲を出すことも出来ないのです。やがて私が何ういふ拍子にか寝返りを打ちますともう怨霊は私の上から退いてゐるのです。あなたは宗敎學校で惡魔拂ひの術を學びなすつたさうぢやありませんか。イワン様、どうぞ助けると思つて、その術を教へて下さい。そして怨霊避けの護符なり藥なり私に恵んで下さい。私は小麥を二升持つて、お禮にまゐります。」

「バラモンさん、私はあなたをもつと惻怍な方だと思つてゐました。所が、今の言ひごとは何です。出鱈目にも程があるぢやありませんか。」

「和尚様、あなたは私の言ふことを信じて下さらないのですか。眞實なんてすよ、怨霊が私を壓しつけに来るのは、嘘だと思ひなら、ネニ

「ラ婆さんに訊いて御覽なさい。その怨靈は又私の所の馬をも憎んでゐるのです。ある朝私が馬舎へ行つて見ますと、その馬が汗びっしいりになつて、ぶる／＼顛へながら秣槽の下に横たはつてゐるのです。て、引起して乗廻して来ますともう何ともありませんてした……」

「何もそんなことに驚くことはありませんよ。あなたは今後は仰向きに寝ないで、横向きにお寝みなさい。あなたが夜魔されるのは、仰向きに寝てゐて、血液の循環が止るからです。」

「それでは馬が秣槽の下へ嵌まつたのは何故でせう。まさか自分で這入る譯も無いでせうが。」

「いや、それは馬が自分で這入つたのです。」

「何故でせう？」

「何故と言ふまでもなく、あまり蠅に刺されたからです。」

「そんなことがあるもんですか！それでは怨靈は？……」

「怨靈？そんなものは此の世の中にあリません。」

「無いもんですか。ありますとも。現に私は、聞いた所でしたけれど、その怨靈を見たのです。あなたが無いと仰有るのは、御自分が見たことがないからです。私などはちやんと見て知つてゐます。全身が炭のやうにまッ黒て、體格もよく長も高く、肩幅と來たら特別廣い……」

「まあ／＼出鱈目を言ふのは澤山です。言ひ過すと却つて罪になりますよ。」

「宜敷うございます。あなたは自分で見たものでなければ信じないのです。宜敷うございます。あなたのお言葉に従ひませう。しかしあなたは何といふ和尚さんでせう。全く信者らしくもありません。私はもう決してあなたの所へは懺悔に來ませんから。さよなら。」

百姓は怒つてその場を立去りましたが、和尚のイワンはその後とんでもないことになりました。といふのは他でもありません。村中の者が此の和尚を無神論者だと呼びなし、或る一部の者は全く會堂へも行かなくなつてしまひました。それがために一年と経たぬうちに、彼は他の壇下へ移つてしまひました。

頑固で愚かな迷信家には何を以てしても勝てません。彼等に対しては眞實を語ることも險呑です。さういふ例は歴史上澤山あります。

七 馬鹿のヒラーツカ

トルストスーモフといふ人に、ヒラーツカといふ馬鹿息子が居りま

した。こんな大馬鹿者は到底他所では見られません。父親よりも愚鈍なのです。父親はわが子のことですから、ヒラーツカを可愛がり、酒も飲ませれば、何所へでも連れて行くといふ風でした。

ヒラーツカは田舎育ちでした。が、或る時父に連れられて船に乗り込み、ニージュニイからカザンへ出掛けました。その渡航中ヒラーツカの喜び方ツたらありません。何を見ても感嘆し、何を眺めても驚いてゐました。しかし途中何一つ得る所はありませんでした。

やがて家へ歸つて來ました。すると、何ういふ積りだツたか、鍵番をしてゐるメラニヤといふ女中が、そのヒラーツカに向つて旅行のことを訊ねました。馬鹿者のヒラーツカは得意になつて話し出しました。

「此の村なんかは是れでも随分大きい方だらうが、でもニージュニイ

やカザンに比べたら、物の数にも入らない。あちらへ行かうものなら會堂や十字架などは數へ切れぬ程ある。家が多いばかりぢやないのだよ。」

「さうですか、では何が一番綺麗でした？」

「何を見ても綺麗だったよ。あ、さうく僕がウォルガで見た事を話さう。それは奇妙なんだよ。」

「奇妙って、どんな？」

「あの、僕等が帆をあげて走つてゐると、岸にある家も木も皆駈けるのだよ。そして僕等が岸に着くと、それ等の木も家もびったり止まつてしまふのだ。また僕等が出掛けると、矢張り同じやうに駈け出すのだ！」

「ヒラ、ツカさんは本當に御冗談がお上手ねえ！家や木は立つてゐただけだ、あなたにさう見えただのでせう。」

「いや、本當に家が駈け出したのだ！」

「あなたから見ればねえ！だけどあなたは本當に智慧が足りないわよ。」

「何言つてんだい、お前が馬鹿で解せないのぢやないか、もう一度言つてやるから、能く聞け。僕はお前が本當にしないなら、神様に誓つて言ふ。家も木もみな後の方へ駈け出したのだ。」

「ヒラ、ツカさん、もう澤山、そんなつまらんこと言ふのはお止しなさいよ！」

「おや。まだお前は信じないのか、メラニヤ！僕はお前と冗談を言つてるんぢやないぞ。いつかりしろい、まだ信じないのか？」

「まゝ。」

「駈け出したんだってば！」

「さうですか。」

「さうですかぢやない、さう信じろと言ふに！」

「私は氣が觸れちやゐませんよ！」

ヒラーツカは何うしても納得させようとして、拳骨を固く握り締めました。そしてばかりと飛ばしました。それで漸く鍵番の女中は一切彼の言ふ通り信じました。

私は伶俐者と争ふのは好きです。それによつて自分に得る所がありますから。しかし馬鹿者と争ふことは控えます。そして一も二もその言ふなりになつてゐます。

八 二人の女友達

二人の婦人が、とある店て出逢ひました。

「あれまあ、ブラスコローウイヤさん、お久しぶりでしたわねえ。」

「あや、アンナさんでしたか、私は此の夏ツウエリの方から此方へ参りましたの。」

「さうですか、もう五年もお目にかゝりませんでしたね。でも斯うして逢へるのは本統に縁がありますわ。」

そこで二人は三度接吻し合ひました。

「私こんな嬉しいことは無い……。だけどあなた随分變りましたねえ。大層お痩せなすつたやうですよ！……」

「さうですか、あなただつてさう太りはしませんよ！」

「勿論、御亭主があまりなさるんでせうね？」

「あら、今年で四年目よ……」

「さう？て、あなたの御亭主ツて何んたお方？」

「それは狡い人よ、官吏でね、ブラウオロフといふの。お金は大分あるんですが、それは——吝嗇漢で、おまけに嫉妬家て……」

「私の亭主はね、年老つてゐて、少々抜けてゐて、おまけに詩人なのよ。」

「私はね、いつも家を閉めきつて暮してゐるので、人様を見ることも無いのよ。若し一寸でも窓を覗かうものなら、もうあの人が大騒ぎです。嗚鳴るやら叱るやら……」

「さうですか、私の亭主と來たら、それはまた非道いのよ。晝ても夜てもいづきりなしに、私に詩や歌を讀みさかせるのですもの……」

「まあ——私の言ふことも聽いて頂戴よ。私の亭主はもう嫁夫てしたのよ、レンスカヤといふ——御存じぢやありませんか——その方と結婚したのでした。そして死なれてしまつたの！」

「所が私の亭主と來たら、最早家内を二人も、スモレンスカヤへ遣つてしまつたのです。随分ぢやありませんか。最初の方はまるで氣が狂つてしまひ、次の方は肺病にされてしまつたんです。私も今あの人の詩には閉口してゐますが、本當に何うしてよいか解りませぬわ。」

「あれ——御覽なさい。嫉妬家の亭主が私の方へ駈けて來ます……」

「あら、どうしませう、私の詩人も來ますわ！」

「いふうちに嫉妬家は駈けつけました。」

「ブラウスコロウイヤ！お前は何故こんなに遊んでゐるのだ。さア——家へ歸る時刻だ！一體今迄何をしてゐたのだ？これ！」

「何をそんなに嗚鳴るんです、見ツともない。私は今此處で友達に逢つてゐたのです。まる五年もお互に逢はなかつたもんで、すから、双方共大きくなつて……」

「さうかく、それは結構なことだ。……いやあなた何うも失禮しました。私は斯ういふ者で……何分とも……だがもう六時ですから……」

男の人が斯う言つて居る所へ、

「私は聴かせることがある！」と叫びながら駈けて来たのは、白髪の氣狂ひ詩人でした。——「アンナ、いゝか。お前に好い端歌を書いて来たよ。聴いて呉れ……」

「あなた、人前がありますよ、見ツともない。それよりか私に友達と話をさして下さい。」

「もし、一寸お訊しますが、あなた方は商人ブリブイトキンの埋葬歌をお読みになつたことがありますか？ 實際ホルモゴールの詩人もこれ程のものは持ち合せませんよ！ さア、この店へお這入り下さい。私が一つその歌をあなた方に讀んで上げませう。それからおま

けに寓話を五つ程話して上げます。」

かう言つて、その詩人は官吏の襟首を把りました。把られた方は一寸驚きました。が、やがてその妻をも自分と一緒に中へ曳き入れました。通りかゝりの人々は店の前に黒山を築いたので、客が来ても通ることが出来ない有様です。破廉耻の詩人は有りつた力の力を入れて、一生懸命詩を讀んでゐました。妻が傍からそれを制しても、商人が店から逐ひ立てやうとしても、一向お構ひなく、彼は疑と腰を据えて頭を振りながら、どん／＼讀み續けてゐました。そして嫉妬家の人をその側から放しませんでした。引止められてゐる嫉妬家は暫らく黙つて聽いてゐましたが、しまひには堪り兼ねて、

「ヤ、お巡查さん！」

と嗷鳴りながら駈け出しました。すると詩人もその後を逐つかけ

て、

「待て！待つてくれ！私はまだ寓話を話さないのだ。それを聴かずに逃げるといふ法があるか！」

と、叫んで駆け出しました。

やがて、その二人の姿が見えなくなりますと、プラスコイウイヤはア
ンナに向つてかう言ひました。

「あなたの御亭主は、本統に非道い方ですね。私これ程とは思ひませ
んでした。私の亭主は、それは嫉妬家で、殿しくて、争ひ事が好きですけ
れど、でもあなたの亭主に比べれば、まだ我慢出来まますよ！」

私自身も不幸にして詩人です。詩を作ることが大好きです。そ
して出来上ると、その詩を親しい者に讀みさせずには居られま

せん。私の妻は可哀さうにも、讀みあげられる寓話やお伽噺など
を厭でも凝つと聴いてゐなければなりません。お氣の毒なこと
だが彼女は黙つて、たゞ眼を細くしてゐます。私は自分に就いて
考へても、これだけのことは解ります。どんな詩人でも自分の妻
に對しては暴君であると。

九拳銃

「おい兄弟君は何だつて眼なんか縛つてゐるんだ？」

「悪戯をして、罰が當つたのさ。」

「えッ？」

「幅を利かせようとして、却つて片目になつたのさ。」

「それはまたどうした譯なんだえ？」

「なに、ピストルの射ち合ひをして、こんな眼なしになつたのさ。」

「誰とそんなことをしたのだ？」

「ジョンポルテルと。」

「あ、それなら僕の知つてる奴だ。あいつと來たら、無駄丸は放たないからなア！」

「何言ッてんだい。僕なんか彼奴見たいな射ち方はしやしない。數十歩離れた所から蠅を狙つてもちやんと中てゝ見せる。僕はその調子で凝つと彼奴の額を狙つて、ぼんとやつたのさ。」

「彼奴を殺してしまつたのか？あいつは倒れたのか？」

「いや、それが君さうでないのだ。却つてピストルが破裂してしまつたのだ……。ひどいことになるもんぢやないか。所が相手はそれをいゝ事幸ひにして、忽ち引鐵を引いてしまつた。そして僕の目に一發

射ち込んだのさ。こゝまで來たらもう序だ、いつそのこと皆話してしまへ。其奴のピストルといふのは一尺五六寸もあつたよ。まるで大砲ぢやないか。おまけに機械がいゝと來てる。英國で一對百磅した品なんだ。所が僕の持つてゐたピストルは成つちやいなんだ。實は哥薩克のマカールから借りたんだが、何しろ此處八年ばかりは射つたこともなく、また手入れをしたことも無く、そこに洒して置いたので、餘程くるツてゐたに相違ないが、僕はそれを磨くことに氣が附かなかつた。所が此の頃になつて漸く僕に素敵なピストルが舞ひ込んだから、僕はもう一度ジョンの所へ決闘を申込んだ。けれど、あいつ狡い奴で、それに應じて呉れない。——何とかして復讐する方はないものかしら。あつたら君教へて呉れ給へ。實際何うしたらいいだらう。」

「どうするツて、君先づ眼の治療をし給へ。それから、一つ言つて置

くが、あまり饒舌らぬ方がいゝよ。」

四へムニツエル物語

一時計の針

ある町の高樓に一つの大きな時計がありました。ある日その針が自分の功績を擧げて、自慢の鼻を蠢めかし、他の部分に向つてかう言ひました。

「諸君、諸君は吾輩に對しては尊敬の念を持たねばならぬ。吾輩は町中の者に對して、眞面目に職務を盡して居る。事に従ふ者は先づ吾輩に度り、労働をする者も、休憩を取らうといふ者も、みな吾輩によるてはないか。鐘を打鳴らして祈禱に集ることも、吾輩あつて始めて出来るのだ。だから一言を以て言へば、吾輩は總ての者に緊要なる時間を示

して、事を正確に行はしめるのだ。そればかりではない、吾輩は凡ての建物よりも高い。全市街は吾輩の眼下に蠢めいてゐるのだ。吾輩は一切の物の仰ぎ視る所、總ての物は吾輩の俯瞰す所ぢや。そこへ行く、と諸君には言ふべき程の價値もありはしない。だから誰一人諸君を仰ぎ見るものはない。」

他の機械共は之に答へて言ひました。

「まあ、ちつと静かにして呉れ給へ、僕等にも言ひ分がある。いゝかい。さういふ君を司つてゐるのは一體誰だと思ふ？考へて見給へ、それは僕等ぢやないか。君一個としては何の價値も持つ事は出来まい。君は恰度彼の人間とかいふ奴が、自分のために他人を働かせて、他人の労働に依つて、自分を尊大にきめ込むやうな調子で、威張つてゐるのだ。」

二妖怪

人々が自分で、平安な生活を破る時には、悪魔が遣つて来て人を脅すものです。

ある一人の旦那の家へ、毎夜悪魔が現はれては家中を歩き廻るので、怖ろしくつてたまらず、何うにかしてこの災ひを避けたいと思ひ、出来るツ丈の手段をつくしました。香爐を焚くやら、祈禱を献げるやら、十字の印を、我が身にも其の家にも、窓と言はず、扉と言はず、家が眞白くなる程白墨で描きました。けれど祈禱を以てしても、十字の印を以てしても、矢張その災ひから救はれる譯には行きませんでした。

所がある日のこと、この家へ一人の詩人が遣つて来て、泊ることになりました。主人はお客様と二人で淋しさを分つことが出来ると思ひ、大

悦びて迎へました。やがて主人は詩人に向つて、何か自作の詩を一つ
 朝讀して貰ひたいと願ふのでした。詩人は得たり賢しと、快く承諾し
 て、涙劇の一篇を朗吟しました。主人はこれによつて何等の感興をも
 得ませんでした。作者自身はいつしか恍惚の境に入つてゐました。
 そのうちに時刻が來ますと、悪魔はまた例の通り姿を現はしました。
 けれども此度は何の變化をも見せないで、たゞ主人だけに顔を見せ、肌
 膚を引張つて消え失せました。主人はこれを見ては、あ悪魔のお氣
 に召さぬものがあつたためだナ、と察し翌晩再び詩人を招いて、更にそ
 の詩を一つ吟誦して貰ひました。と、此度も悪魔は姿を出しましたが、
 直ぐ又逃げ去つてしまひました。主人は獨り胸のうちで打ち喜び、
 「待てよ、此度は俺がひとつサタンを征服して遣らう。さうしたら最
 早二度と來ることはあるまらう。」

と言ひました。そして其の次の夜は、主人獨り居残つてゐました。
 果して眞夜中の鐘が鳴り響きますと、悪魔は姿を現しました。が、主人
 は時をすかさず、

「おい誰か早く、昨夜詩人の讀んだ喜劇を持つて來い。」

と叫びました。すると悪魔はびつくりして、呼ばれた家僕を制する
 ものゝ如く手を振りくゞ消えてしまひました。そして此時から悪魔
 は一步も此の家に足を入れませんでした。

〔「涙劇」といふ語は當時の社會に非常な歡迎を受けた戯曲の一種に
 對して、ヘムニイツエルが與へた諷刺的の名稱です。そして、此の
 寓話も特に此の涙劇に對して嘲笑的に作られたものです。涙劇
 に對してはスマロロコフも其の評論に於て駁撃を加へました。〕

三狼と犬

一匹の狼が久しく餌食にありつかないで骨と皮ばかりに痩せ脱けてゐました。所が或る時犬に出會はして見ますと、その犬の美しい事、強さうな事、肥つてゐる事と言つたら、實に羨ましい程でありました。そこで狼はこの犬を捕へて、自分の元氣を回復してやらうかと思ひましたが、悲しい哉、逆もその犬に叶ひさうもありませんでした。て、詮方なく手段をかへ、狐のやうな鄭重な様を粧ひ、阿諛と諂媚とを以て犬の肥満なのを讃めそやし、口を極めてお世辭を列べたてました。

犬はそれに答へて、

「君は何もそんな骨ばつた様子をしてゐるにや當らない。一つ思ひ切つて僕等と協同し、住居を町に移せばいいのだ。さうすれば君は見

違へるやうになつて、自分でさへその肥ふやうに驚くだらう。所が君の今の生活は一體何といふ態だ？食ふや食はずて方々をぶらつきまはつて、そして人様のお残り位で生きてゐるぢやないか。止し給へ。それでは實際生き甲斐があるまい。凡ての物は戦鬪を以て取らなければならん。本統に君のその姿はなんとといふことだ？その惘然した格好は何んといふことだ？久しく餌食に有りつかなくつた其の君の瘦せやう！否、何といつても我々の生活に越したものはない！好きな物は食ひ放題、客の残した骨や食卓の残品は藏ひ所に困るといふ有様！搦て、加へて御主人から受ける寵愛は言ふに言葉もない位だ！」

と言ひました。狼は、此のやうに華やかな暮し向きを聴かされて、まるで恍惚となり、眼には涙まで浮べてゐましたが、やがて來るべき楽しい宴會のことを心に描きながら、

「そんな豊かな生活をするには、何んな職務をしなければなりませんか？」

と訊ねました。

「何職務なんてまるでありません！ たゞ他所の人を庭内に入れないうやうにすることと、御主人の愛を受けようやうに媚る事、家内の人と見たら、その身邊に付き纏ふばかりさ！」

狼は之を聞いて大に喜び、足元の見えぬ程駆けだしました。住みなれた林も今は反吐の出る位厭になり、さてこれから町に住むのだと思ふと、同類のうちで、自分が一番幸福な者のやうに思はれました。

すると、途中で頸の毛の擦り切れた犬に遭ひましたから、狼はその犬に向つて、

「何うしたんだい、君の頸の毛はさッぱり無いぢやないか。」

と訊きました。

「いや、何でもありません。ほんの詰らん事さ。」

「だけれど何卒聴かして呉れよ。」

「眞實に何でもありません。これは僕が紐で縛られてゐたから、そのためだらうサ。」

「紐で？」と狼は驚きました。——「そんなら、君は全く自由に、何の束縛もなく暮してゐるんぢやないのだから？」

「全く然うだとは言へないが、だが君はそれを聞いて何にするんだ？」

「何にする所ぢやない。僕の一生に關はる事なんだ。——よし、僕は何んなことがあらうとも、君達の宴會に列りはしない。否、自由は我々に取つて何より貴いものだ。自由に較べれば屈從なんか、なんの價

値もありやしなう。』
かう言つて、狼は森の奥に隠れ去りました。

四 哲學者

悴を持つた一人の老人がありました。聞く所によると、今時の人は皆其の子を外國へ遣るとのこと、そして又外國の土地を踏んで来た者は、他の者よりも非常に尊敬される、といふ話でした。て、此の老人も悴を海外留學に遣らうといふ氣になりました。彼は金満家でありましたから、自分の悴も人の前に後れを取らしたくなかつたのです。

悴は愈々外國へ赴きました。そして何を學んだてせうか。生れつき愚物であつた彼は、尙一層愚かな者となつて歸朝しました。彼は留學中、説明し得ないものを説明して、人々を迷はす嘘言者の手に陥ちた

のでした。嘘言の先生は此の少年に學問を教へなかつたばかりでなく、却つて馬鹿者にしてしまひました。

此の悴は以前は愚かな事を飾りなく、饒舌り立てるだけでしたが、今度は學者らしく物事を説明する人となりました。以前は馬鹿な人達だけが彼の言ふことを解りませんでした。今は賢い人も彼の言葉を了解することが出来なくなりました。そして家中の者も町内の者も、世間の者も舉つて彼の嘘言を厭ふやうになりました。

或る時此の悴は道を歩きながら、頻りと自分に課された古い問題を考へてゐましたが、餘りその方へ氣を取られてゐましたので、突然穴の中へ落ち込んでしまひました。折も折其處へ來合せた父親は之を見て、大層驚き、急いで家へ繩を取りに行きました。そして家の人々を連れて來て見ますと、驚いたことには、かの瞑想に沈んでゐる青年は凝と

その穴の底に坐つて、

「抑も墜落の原因は何であらうか。自分が躓いたからだ。それなら躓いた原因は何であらうか。無論それは地震である。併し急に穴の中へ突進すると、空気の壓迫を生じ、地球と七遊星の穴と交通することが出来る。」

なんかんと、獨り首をひねつてゐるのです。でも、父親は息子を救ひ出さうと思ひ、繩を下げてやりました。

「それ繩だ捉へろ。そして解けないやうに體に結びつける。俺が今引揚げてやるから。」

「いや、引揚げることは待つて下さい。一體繩とは何ですか？」

父は學者ではありませんでしたが、生來賢い人でしたから、其の愚かな問にかう答へました。

「繩か、繩とは穴に落つちた者を引揚げる道具だ。」

「人を引揚げるには、もつと完全なものを造らなければ駄目です。これぢや餘りに單純過ぎます。」

「時間は貴重だ。これで宜いんだ。これで澤山だ。」

「時間、時間とは何ですか？」

「時間とは馬鹿者と一緒になつて過してはならない貴重なものだ。俺が復歸つて来るまでそこに坐つてゐろ。」

若しも他の理窟屋を連れて来て、彼の相手に、同じく此の穴に投げ込んだら如何でせう。彼等の爲にはもつと大きな穴が必要です。

五 鶯 と 鳥

鳥類の間には、人類の間に見るやうな感情が無いと言ふ者が多いけ

れど、猜みの情は矢張鳥類の間にも見受けます。いやその感情は却つて人間のそれよりも一層甚だしいやうです。

鶯の聲の美しいことは、今更めて言ふまでもなく、能くあらゆる者の心を酔はしめます。所が一本調子の聲しか持たない鳥共は、之を猜んで、互にかう相談しました。

「我々は同盟して、鶯の野郎にあの秀れた美點を現はさせないやうな工夫を考へなければならぬ。それには彼奴が歌ひ初めたら、我々も一緒に嗷鳴つてやるんだ。さうすれば彼奴の聲が我々の聲に消されてしまふに違ひない。だが、それでも彼奴の聲が勝つやうだつたら、其時は彼奴の聲を聞いて腰を抜かす奴の所へ行つて、彼奴の歌を滅茶苦茶に罵つてやらう。何時迄彼奴が勝ち通せるものか。また我々はいつまで彼奴の前に、羞恥を忍んで黙つてゐられやう？」

やがて、鶯が啼き出しますと、鳥は一群集つて叫び立てました。けれど鶯の聲はその調子を崩さないで、尙一層朗かに林の中に響き渡りました。

鶯の歌を擾亂さうとした鳥の悪謀はとうとう不成功に終りました。何とあはれなものではありませんか。

自分では拙い文を作りながら、秀れた作家の悪口を言ひ、有ゆる讒言、誹謗を盡して、その名譽を傷けやうとする賣文の徒も、恰度かうしたものです。

六馬と驢

私共が善いことをしますと、その善いことはまた自分へ歸つて來るものです。だから、困つた時には、互に扶け合ふやうにしなければな

りません。

ある時、馬と驢とが道伴れになつて行きました。馬の方には全く荷物がありませんでしたが、驢の荷物と言つたら、それは氣の毒な程、澤山ありまして、今にもその重い荷の下に押し潰されさうでした。そこで、驢は馬に向ひ、

「俺には逆も彼處まで背負ひされる力はない。きつと途中で斃れてしまふ。見れば君には背負はされた荷物が無いやうだ。どうか少し手傳つて呉れ。俺は此の通り苦しんでゐるのだ。」

と言つて、その積荷の一部分なりとも軽くして欲しいと願つて見ました。所が馬は、

「何？俺がお前の荷物を背負ふのか。それは眞ッ平だ。」

と、いへなくはねつけてしまひました。仕方がありませんから、驢は

力の續く限り足を運んで、そしてとう／＼斃れました。すると、その報ひは忽ち現はれて、馬は今度獨りて驢の荷物を全部背負はされ、尙その上に、剥ぎとられた驢の毛皮までも荷う事になりました。その時馬は始めて心づき、先きに驢の言を退けたことを切りと悔ひました。

七 縛られた犬

誰だつて束縛されてゐれば、自由な身になりたいと思ひます。けれど小さな不幸を大きな不幸にしてしまふことがありますから、よく考へた後でなければ、手を下すものではありません。一匹の犬が束縛を免れようとして、紐を解き始めましたが、思ふやうに解けませんから、ぶつたりと噛みきつて逃げました。けれど紐は前よりも短くなり、またしたので、二度目に繋がれた時には、前よりも一層窮窟を感じました。

八 鶯と金翅雀

ある家の軒下に金翅雀と鶯とが吊してありました。そして両方共囀つてゐました。

鶯が啼き出しますと、その家の小さい見が父さんの手をひっぱつて、

「父ちゃん、あの善く啼く鳥を見せて……よう……よう……」

と、からまるのでした。

そこで、お父さんが二つの鳥籠を脱して、

「坊や、さ御覽。坊やは何の鳥がいゝ聲を出したと思ふ？」

と訊きますと、小見は直ぐ金翅雀を指して、

「父ちゃん、これよ！」

と云ひました。そして金翅雀を見て大變喜んでゐるのでした。

「何ッてきれいな羽でせうね、父ちゃん。それに聲もいゝのネ！」

此のやうに外貌は人を欺きます。

九 蠕虫

ある人が美しい花園を散歩しながら、蠕虫の棲巢を發見しました。

蠕虫は花園に於ける一種の傳染病のやうなもので、其の風致を害すること一通りでありませんですから、これを見つけた園主は、まるで宿年の

の讎敵にでも出會つたやうに、忽ち持つてゐた杖で打ち落しました。

蠕虫は堪つたものでありません、古巢もろとも崩れるやうに散らばり

ましたが、是も却々圓太い虫です、又もや群をなしてその敵の杖にゾロ

くと匍ひ上つて來ました。そしてますます手許へ逼つた時、杖は再

び宙を切りました。と思ふと、此の最後の一撃で、蠕虫は残らずに塵殺されてしまひました。

賣文の徒を懲らすには、手強い杖を以てしなければ駄目です。

一〇二人の隣人

古い諺に、悪しき平和は善き争闘に優るといふのがあります。私共も亦、如何したら争はないで済ませるかといふことを常々研究してゐます。けれど若し或る出来事から急に紛争が持揚がりさうな時は、それを増長せしめないで、早くその根を断ち切る事が肝要であります。また、訴訟にでもなりさうならば、それが提起されぬ前に、和解を結ぶことに力を用ひねばなりません。裁判に訴へて迄も勝を取らうとなると、最初は一枚の銅貨から起つたことでも、遂には兩家の破産といふ

惨な運命を招くものです。

ある家の豚がまよひ出て、隣の庭に這入り、庭を過ぎて園に入り、其處で過失の種子を蒔きました。といふのは外でもありません。畦を少々掘り返したのです。所が隣の人達は、總立ちになつて喚くやら、馳せるやら大混亂です。

「それ／＼、犬を、犬を、犬を早く……」

一家の人々は叫びながら、家から飛び出して、物を投げたり、逐ふたり、叩いたり、四方八方から取圍んで、薪箒、火斗、帽子、無茶苦茶に攻めるのでした。犬の吠聲、豚の唸聲、人の號叫、打撃の音……あまりに騒ぎがえらいもので、すから、主人までも駈け出して來ました。そしてとう／＼其の豚を打ち殺してしまひました。

隣り合つた二人の主人は互に訴訟を起しました。——何としても和

けることの出来ぬ憎悪の念が兩者の心に充ちたのです。その呼吸は炎のやうでした。一人は堀りかへされた庭園のために訴へて、

「私は豚の堀り返した園を辨償はせなければ承知しません。」

といひ、他の一方は殺された豚のために訴へて、

「私は殺された豚を返して貰はなければ承知しません。」

と言ひ張つてゐました。彼等兩人は互に罪過の非と免れないので

すから、互に譲り合つたならば、大したことはなかつたのです。けれど彼等の心は茲に在るのではなく、唯如何して訴訟に勝を制しようかといふこと一杯でした。

でも愈々最後の解決がつかましました。けれど其の時には兩方共總ての家屋敷財産を裁判官に渡して、無一物になつてゐました。此の時裁判官は口を開いて二人に言ひ渡しました。

「茲にあなた方の訴訟事件は決せられました。今はあなた方が、互ひの利益のため、且は善徳のために和解すべき時であります。」

一一 親友

親友を選ぶには、先づその人を試みなければなりません。

ある農夫が、固く張り詰めた氷の上を渡つて行きますと、どうした機勢か、彼の貨物は氷を押し碎いて沈みかゝりました。農夫はうるたへて、

「あゝ皆さん。沈んでしまふ、助けて呉れ、助けて！」

と呶鳴りました。一緒にに行つた農夫等はそれをきゝつけて、

「よい、行つて助けてやらう。」

「あう、助けよう。」

と早速来て呉れましたけれど、貨物に手をかける者は一人もありません。

せん。彼等(かれら)はもとく同じ村(むら)に住み、親友(しんゆう)として互(たがひ)に酒(さけ)を酌(しやく)み交(か)したことも一(いち)再(さい)ではありませんでした。そればかりか、彼等(かれら)は互(たがひ)に兄弟(きょうだい)兄弟(きょうだい)と呼(よ)びあつてゐたのです。

所(ところ)が此(こ)の兄弟(きょうだい)の荷物(にもの)は今(いま)にも沈(しん)まんとして居(ゐ)るではありませんか！幸(さい)にもそこへ他村(たそん)の人(ひと)が通(とほ)りかゝつて、早速(さつそく)手を卸(おろ)し、やうやくの事(こと)で荷車(にぐるま)をひきあげました。

一一一 老人と死神

ある老人(らうじん)が薪(き)を一束(たば)背負(せお)つて行(い)きました。が、霎時(しはらく)歩(ある)くと、腰(こし)は痛(いた)むて來(く)る、足(あし)はくたびれて來(く)る、呼吸(こそ)はせまつて來(く)るといふ始末(しまつ)。おまけに此(こ)の時(とき)は恰度(ちやうど)秋(あき)で、道(みち)が雨雪(あめゆき)のため(ため)に泥濘(ぬかるみ)つてゐましたから、その骨折(こねせき)は一(いち)ト通(とほ)りてはありません。とうく足(あし)も利(き)かなくなつて、どツかと

路(みち)の真中(まんなか)に倒(たふ)れてしまひました。そこで、老人(らうじん)は切(き)ない聲(こゑ)を出(だ)して、

「あゝ、あゝこんな憂(うれ)き目(め)を見(み)るよりは、寧(な)むそのこと早(はや)く死(し)んだ方(ほう)がよい。本當(ほんたう)に死神(しにがみ)といふものがあつて、苦しんでゐる者(もの)を安(やす)らかにして呉(く)れるものなら、早(はや)くこゝへ來(き)て、俺(わし)の苦痛(くるしみ)を醫(い)して貰(もら)ひたいものだ。」

と、痛(いた)く其(その)身(み)の苦痛(くるしみ)を訴(うた)へました。すると、その聲(こゑ)に應(こた)じて、ひよッ、ぐりと怖(おそ)ろしい死神(しにがみ)が、老人(らうじん)の前(まへ)に立(た)ち現(あら)はれました。そして、

「今(いま)俺(わし)を呼(よ)び出(だ)したのはお前(まへ)だな？」
と、其(その)輝(かが)く眸(ひとみ)を老人(らうじん)の横面(よこづら)に向(む)けますと、老人(らうじん)は周章(しゆぢやう)狼狽(らうたい)いて、
「否(いな)々(々)。何(なに)ぞ致(いた)しまして。私(わたくし)ではござりません。」
と叫(こゑ)んで、その傍(そば)にゐる人(ひと)を指(さ)しました。

一三 熊と狐と狼

熊と狐と狼と、此の三匹は互ひに仲睦じく暮してゐました。そして、散歩をするにも、飲食をするにも、また獵に出るにもいつも一緒でした。ある時此の三匹揃つて、一疋の小さな犢を偷みましたが、熊はその獲物を両手に抱へて、

「おい／＼みんなよ／＼く聽け、若しも此の獲物を三つに分けて、その一塊づゝを取ることにになると、何うしても我々の飢餓を凌ぐには足りない。それだから我々の中の一番老人株が、之を取るとしやうぢやないか。他の者にはまた後で、稼いだのをやるとして。年寄といふものは何所へ行つても、先づ主席を占めるものだからな。」

と言ひました。すると狐が、

「宜いとも、開闢の初め、天が造られて星晨が輝いた時、何しろ此の俺様が一番最初に御誕生遊ばしたのだからな。」

といふのを受けて、狼も負けぬ氣になり、

「なる程、お前達も随分老人株には違えね。だがのう、まだ星だの何だのが、天に現はれない先に生れたのは俺だぞ！」

と言つて、つ／＼と犢を食ひに近寄りました。すると熊が牙を露き出して、

「何言つてやんだい。俺は年こそ若いけれど、腕力にかけちあ貴様達の到底及ぶ所ぢやねえぞ。嘘と思ふなら掛かつて來い。食ひたいのは俺も同じ事だ。こうなつた上は年寄株も名譽もあるものか。」と呶鳴りました。

一四 犬とその影

一匹の犬が老婆の物置から肉を一片盗み出しました。が、日頃の經

験によつて、此の老婆が頗る的のやかまし屋で、肉一片のためにも鐵又
 や鉤などを持出して、足をも挫くやうな勢を示すのを知つてゐまし
 たから、急いで老婆の眼の前を逃れ、とある泉のほとりに出ました。犬
 はその岸邊に一と先づ身を横へて、儼然と来た品で飢を醫さうとしま
 したが、ふと流を見ますと、其處にも一匹の犬がゐて、矢張肉を一片銜へ
 てゐます。て、それをも亦欲しいと思ひ、ワンと一聲叫んだからたまり
 ません、口に銜へてゐた自分の肉を落してしまひました。

此のやうに盗んだ獲物で満足せず、尙も他の空しい影を捕へやうと
 する例は、此の塵の世にいくらあるか知れませんが。

五 ドミトリイエフ物語

一 犬と乞食

大きな旦那様のお邸を護つてゐた犬が、囊を首にかけた乞食の老人
 を見付けまして、頻りと吠え立てるのでした。老人はぶる／＼戦まな
 がら、

「どうか俺を憐んで下さい！俺は一晝夜も空腹をこらへてゐたので、
 今にも息が断れさうです！」

と微かな聲を出してお願いしました。すると、犬の答がかうなので
 す。

「だからさ、お前に食物が恵まれるやうに、一生懸命俺は吠えてゐるのだ。」

何と感心な犬ではありませんか。外貌では全くわからないものです。野獸のやうな顔をしてゐる者がその實善良で愛らしい顔をした者が却つて人を咬むことがあります。

二人間と馬

みなさん何うして馬はあのやうに溫和しく私共の言ふことをさくやうになつたのでせう。そのわけが知りたくはありませんか。それはからなのです。

昔も昔ずつと大昔人間がまだ木の根を噛んで美味しいと言ひ、樫の實を食べては此んな結構なものはないと思つてゐた頃の事です。馬車もなければ駕具もなくまた頸圈さへもなく凡ての畜類がその思ふがまゝ好むがまゝに棲所を見付けては暮してゐました。その時分

一匹の鹿が何うしたとか馬と喧嘩を始め角をあげて敵手を衝きました。馬は仕返しをしてやらうと追つかけてましたが残念なことにはその駆け方が鹿のやうな譯には行かずとう／＼逃がしてしまつて獨り地圍太を踏みました。でも遺恨といふものは怖ろしいものです。馬は速く駆けるやうになりたいはッかりに人間の所へ来て仕込方を頼みました。人間はその奮發を喜び之に馬勒を掛けその背中に飛び乗つて毎日毎日乗り馴らしました。そのお蔭で馬はあれほど速い鹿をも後退させるやうになりました。

その時馬は人間に向ひ御禮の言を述べて、

「あなたは實際私の救主でございます此の大恩は生涯忘れは致しません。然し私の背中にはもう御用はない筈さア何卒お下りになつて下さい。今は私も野原に歸らなければなりません。」

と言ひました。けれど人間が、
 「何を言ふのだ俺の所が厭で野原がいゝのか？俺の所に飼はれてゐて氣樂な暮しをした方がどの位得だか知れはしない。燕麥は不斷腹一杯に食べられるぢやないか。」
 と言つて頻りに引留めますので馬もとう／＼居残ることになりました。

然し久らく経つて見ますと、やつぱり自由な天地が戀しいのです。自由が無かつたら美味しいものが山程あつても薩張有りがたくありません。

馬は始めて失敗たと思ひました。けれどその時はもう遅かつたのです。とう／＼軛の下に老耄れて死を迎へました。

三 小銃と兎

獸の中には臆病なものが少くありません。けれどそのうちでも兎はびく／＼者の第一番です。

ある時一匹の兎が眠つてゐる獵夫の傍にある小銃を見て打驚き、腰を抜かしてしまつて逃げることも出来ませんでした。で、たゞ耳を脊中に押しつけて、鼻をうごめかしながら、今にもツドンと撃ち殺される事だらうと思つてゐました。そのうちに一時間経ち、また一時間過ぎました。けれど銃は發射の様もありません。更に一時間経ちました。が銃は矢張黙つてゐました。

兎は喜ばしげに眼を動かし始め、少しく勇氣を恢復して跳ね起きました。そして、不思議さうに銃を看守りながら、後ろに飛び前に跳ねて

のましたが、遂には銃の側へ近寄つて、

「これが俺を愕かしたのか？よしずつと近く寄つて視てやらう……。
おや、死んだものゝやうに黙つて臥てゐらア！何だ、主人も寝てゐらア。

——他人の助けがなけりや、鐵砲もカラ意氣地はないな。まるで樹の
枝同然だ。」

と言つて、忽ちのうちに英雄となりすまし、活潑に手を出して、その小
銃を突つき始めました。すると、銃が口を開いて、

「ヤイ畜生、退け——俺がしようと思へば、貴様等などは影も形も無く
なしてしまふぞ。俺の音響を聞けばナ、あの猛々しい獅子でさへも、生
血を慕ふ虎でさへも慄へあがつてしまふのだ。ソレ——退けと言ふ
に。何をしやがるんだ、馬鹿野郎、愚圖々々してると焼き殺してしまふ
ぞ！」

と言ひましたが、兎は平氣なもの、之に答へてかう言ひました。

「些つとも恐いことはありやしない。今は世の中が開けて、兎の中に
も臆病者が少なくなつたよ。お前が獵夫の手にあればこそ怖くもあ
るが、其の手を離れてゐるからには、何の手出しも出来まい。」

司法官が徒らに安眠を貪つてゐると、折角の法律も何の役にも立ち
ません。

四馬車馬

一對の馬が一臺の馬車を曳いて行きますと、之を見た驢馬が、

「あゝ羨しいなア、何處で見ても始終二疋で、屹度仲も善いに違ひない
！」

と言ひました。すると、一方の馬がかう言つてきかせました。

「馬鹿！お前は唯外見許り見てゐるだけで内心のことは解りやしない。成程身體は二疋一緒に一ツの馬車に繋がれてはゐるけれど、心は一つではないのだ。あゝ然し俺達ばかりが斯ういふわけではない、世の中のことは大概斯うしたものだ！」

五鳩の歎き

灰色の鳩が夜となく晝となく呻き續けてゐます。それは彼の最愛の友が長い間遠い旅に飛び去つたからです。彼はそれ以來決して嘯りません。また小麦をも啄みません。たゞもう悲しんでゐるばかり、そしてさめくと涙を流してゐるばかりです。

彼は枝から枝へ飛び移りながらも始終四方に氣を配つて、大切な友の歸るのを待つてゐます。待つてはゐますけれど、それは無駄なこと

です。早く諦めた方がいゝのです。餘り焦がれてゐると、自分が却つて瘦せ細つてしまひます。

彼は草地に身を潜めて、頭を翼に差し込みました。そして最早呻きもしません。息もしません。鳩は永い眠りに落ちました……

此の時俄かに待つてゐた友が飛んで來ました。遠くの方から心配しながら飛んで來て、今やわが愛する友の上に留まりました。そして彼を呼んだり、叫んだりしました。幾許呼んでも答がありませんから、胸の痛みを抑へながら友の側近く降りて、また一としきり泣いたり、呻いたりしました。けれど、最愛の友は遂々眼を開きませんでした。

六鷲と蛇

ある時鷲が雷の國から野原へ降りて來て、休憩しようと思ひました。

すると草花の中に一疋の蛇がゐて、地面を這つてゐました。猜み深い動物は驚の降りて来たのを見て、ぶん／＼怒り出し、たゞ一と跳びに驚へ打つてかかりました。

此の時鳥類の王は如何したと思ひます？彼は傲然たる視線を投げながら、また太陽の方へ舞ひ上つてしまひました。

天才がその誹謗者に報ゐる道はこんなものです。

七 白鳥と嫩鳥

白鳥が如何にも純白で、而も鷹揚なものですから、嫩鳥共が之を羨み、自分の翼に泥をつけては、白鳥のまはりへ詰め寄つて、故意と羽ぶるひをしました。そして穢ない飛沫をはねかけては、白鳥を汚しました。

しかし、白鳥のためにはそれが少しも害になりませんでした。一度水を潜つて出さへすれば、またもとの白さと鷹揚さとを以て浮び出ることが出来ました。

散文や韻文に於ける嫩鳥共よ。お前達は勝手にちたばたするがよい。然し、眞の天才を傷けることは出来ない。彼が永へに光り輝くのは、實にその運命なのである。

八 醫者の言

醫者が私に言ひました。「どんな病人でも俺のことを悪く言ふ者はありません」と。

そこで私は考へました。「勿論誰だつてそれを言はないだらう。死

は誰の口をも閉すものだから」と。

九 憐み

私は泥棒のために破産しました。

「私はお前の悲みを憐む。」

私の詩文の束が盗まれました。

「私は泥棒の身の上を憐む。」

一〇 狐の説教

中風に罹り、關節レウマチスに冒され、全身よぼ／＼に老ひ老れた狐が、此の浮世と俗界とから遠ざかりました。それでもまだ智恵はよく働き、且つ理論にかけては第一流の名人であつたので、やがて曠野へ傳

道に出かけました。そして、節制と温和と正義との讚美を以て、諄々と説教を始めました。そして、泣いたり歎息したりしながら、兄弟等、の事や、此の世の煩惱のことなどを説きました。

所がその説教に集つた兄弟は、總體で五六匹を算へるばかり。時にはもつと少いこともありました。それも土撥鼠や土龍や、それから敬神家の牝鹿が二三四匹、さもなければ係果もなく、身寄りもない貧しい野獸共ばかりでした。狐はかうした聴衆からは、何物をも期待することが出来ませんでした。

然し狐の眼力は、ずつと遠くにまで及んでゐました。彼はぼつ／＼と、鋭先を變へて、嚴然たる態度を取り、胸愆なる熊共や、狼共、さてはまた虎や獅子に向つて、熱辯の矢を放つてゐました。すると何うでせう？ 來るとも、聴衆は黒山を築く程寄つて來ました。同時に狐の雄辯

の噂は高まつて、とうとう獸類の王様の耳に達しました。獸の王とは言ふまでもなく、獅子のことで、彼はその配下の動物を立派に治めておりました。がこの王様も最早晩年に近づいておりましたので、餘程信神に心を傾けるやうになりました。て狐のことをさしますと、

「それは珍らしい事ぢや、早速狐をこゝへ呼んで、その説法を聴くとしやう。」

と仰せられました。そして、此の言葉に續いて勅令を發し、使者を立て、狐のもとへ遣りました。若しも歴史家の言ふ所が嘘でないとするならば、狐は此の時宮殿へ迎へられて、一日一夜説教をしたといふこととす。

一體どんな説教をしたでせうか？ 狐は暴君等に向つてどい／＼諷責を加へ、また彼等に苦められてる者に向つては元氣を出すことと、そ

れから時と法律とを頼みにすべきことを教へました。之を聞いた宮仕への者共は、呆氣にとられておりました。そして只腹のうちで、

「宮中で能くもあんな大それたことが言へたものだ！」

と思つておりました。そして互に眼と眼とを見交はしておりました。が、追がに口に出して言ふ者はありませんでした。それは、王様自身が狐の言ふことに感心してゐる様が讀めたからです。

兎に角狐の説教は嶄新奇抜なものでした。時にはかうした忠言もなければならぬといふので、狐は大變な尊敬と名譽とを受けました。王様の獅子は彼に握手を與へながら懇ろに言ひました。

「俺はお前の蔭で眞理を識ることが出来た。そして前よりも一層世にありふれた豫言者共を蔑視みたくなつた。時にお前は此の説教の報酬として何か欲しいものはないか？ 何の遠慮も羞恥も要らぬか

「有體に言ふがよい。俺は是非お前にお禮せねばならぬ。」
かう言はれて、狐はあちらこちらをじろく願みました。その様子は如何にも良心の苛責を感ずるものゝやうでしたが、やがて、

「お言葉に甘へて申上げます。王様……」
と、聞へく言ひ出して、

「あの七面鳥を……少々戴きたう存じます。」
と答へました。

ろしあ童話集 終

大正八年五月廿九日印刷
大正八年六月二十日發行

(ろしあ童話集)
正價金壹圓參拾五錢

著作者 昇 曙 夢

發行者 大倉保五郎

印刷者 高桑基次

印刷所 東京市京橋區西紺屋町二十七番地
株式會社 秀英 舍

不許複製

發行所

東京市日本橋區二丁目十九番地
大倉書店
電話本局四一四・二四〇四番
振替東京二三三八番

露國民衆文學全集 (第一編)

昇曙夢譯 (大好評忽再版)

ろしあお伽集

洋裝四六判
函入全一冊
正價金一圓
郵稅金三錢

ろしあお伽は雪深い北國の人々が冬の夜長に爐邊を圍みながら幾百年となく磨き上げたもので其面白い事はおそらく世界に類がありません。い、本書は露西亞お伽の權威アフアナシエフ氏の(露西亞國民お伽全集)から代表的のもの廿六種を選び何人にも分り易い様に最も平易な邦文に直したものでありますからこれまでに出来て居る澤山の月並なお伽に飽きはして居る我少年少女諸君は全く新しい世界を見る様な感じが致すことと思ひます、尙これに依つて露國民の人情や風俗習慣等とも知る事が出来るのであります。

東京日本橋角 大倉書店 振替東京二三八番

露國民衆文學全集 (第二編)

昇曙夢譯 (大歡迎)

ろしあ傳説集

洋裝四六判
函入全一冊
正價金一圓
郵稅金三錢

露國は世界の謎なり、此謎の國に咲匂ふ傳説の數々亦世界の珍也、蓋露國の傳説は全國民の詩的想像力の總計として國民性と國民理想の結晶なるを以て謎の露西亞は殆んど其中に象徴化せられ單に讀物としても國民文學の精華として藝術的價値に富み小説以上の興味を有するのみならず露國近代藝術の名著傑作は凡て是等傳説を基礎とす、本書は編者多年の研鑽に依りて其最も有名なる代表的傳説を悉く網羅して最も平易に譯したれば曾に兒童の讀物として興味あるのみならず露國及露文學の研究資料として之に優るの良書未だなし、各傳説の挿繪亦露國大家の筆に成る名畫を輯集し内容外観共に稀に見る珍本なり。

東京日本橋角 大倉書店 振替東京二三八番

◆ 少年少女の好物 ◆

小巖 波谷 著 お伽新日本 製全一册 送正價 金九拾二錢	小巖 波谷 著 お伽口演集 製全一册 送正價 金九拾五錢	小巖 波谷 著 お伽花見車 製全一册 送正價 金十二錢	春押 浪川 著 春浪快著集 製全三册 送正價 金十二錢 4321 、、、、 郵金金金金 稅各各各各 十八十六十五十六 錢錢錢錢錢	小巖 波谷 著 お伽芝居十八番 製全一册 送正價 金十二錢	春押 浪川 著 空中の奇禍 製全一册 送正價 金十二錢	壽野 惠村 著 シベリヤの少女 製全一册 送正價 金十二錢
--	--	---	--	---	---	---

東京日本橋大倉書店 振替東京二三八番